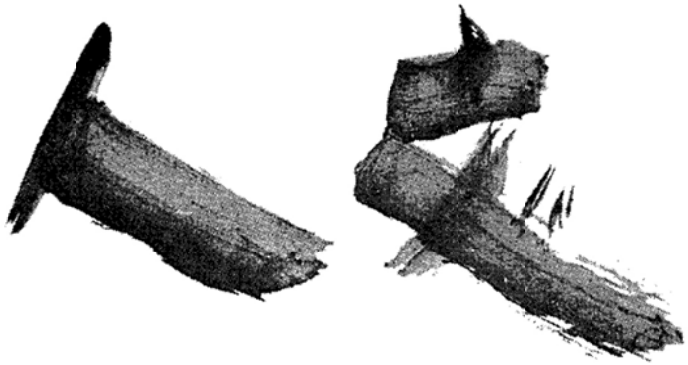


第五四号

2007

京都大学人文科学研究所

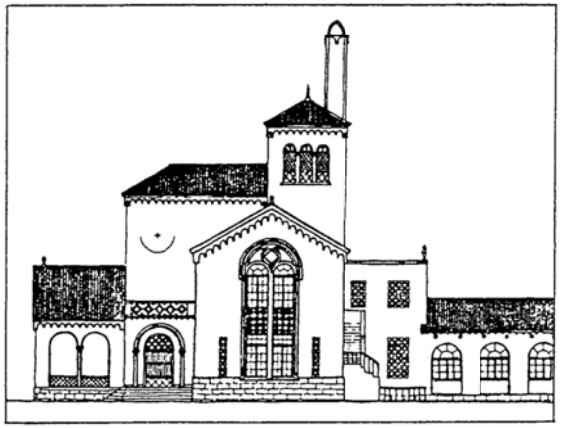
ISSN 0389－147X

人文　第五四号　二〇〇七年六月三十日　京都大学人文科学研究所発行　共同印刷工業　非売品

人　文　第五四号

2006年４月―2007年３月

もくじ



随想

「随想」のようなもの　……坂井セシル　1

変貌するドイツの大学　……ラインハルト・エメリヒ　冨谷至訳

講演　……13

夏期公開講座　名作再読　……13

読書する女――メタ文学としての『ボヴァリー夫人』（大浦康介）／『坊っちゃん』と『風の又三郎』――貴種流離譚としての読み比べ（高橋世織）／『論語』のなかの物語（金文京）

開所記念講演　……17

公債・年金・いのち（坂本優一郎）／ゲノム時代の人間――個の差異と社会における連帯の間（はざま）で（加藤和人）／望楼、楼閣から高塔へ――中国仏塔の成立――（田中淡）

彙報　……22

共同研究の話題　……35

続「カーブル」と「カブール」　……稲葉　穣

近代古都研究雑感　……高木　博志

ケンジントン公園の森と栗鼠　……辻　正博

所のうち・そと　……40

アメリカ大学新事情――ハーバードとＭＩＴ　……竹沢　泰子

感謝、叢書集成　……古勝　隆一

柔らかな背中の街　……久保　昭博

それぞれの浄土　……齋藤　智寛

本を並べる　……片山　杜秀

書いたもの一覧　……47

「随想」のようなもの

坂井セシル

好きなことを書いてください、と言われた時には嬉しかった。なにせ、学業が宿題の山、山、山にしか見えない今日このごろ、自由な課題で随筆のようなものを「人文」に書かせていただけるとは、願ってもないことである。しかし、そこで、急に不安にかられた。好きなと言われても、所詮読んでもらうために書く訳だから、あまり独りよがりなことを書いても意味がない。どんな主題を選ぶべきか。そこで、凡庸だが、つかの間の京都人としての京都礼賛にやはり落ち着くことにした。

たまたま王寺賢太氏に貸してもらった笙野頼子の「居場所もなかった」をとても面白く読んだ。それは大都会東京で、幾度も失敗しながらも、しつこくオートロックの安い部屋を探すある私という女性（笙野自身）が語る、妄想、閉鎖、実存主義的な不安などが不動産の嘘とともに、限りなく連動して行く終わりのない話である。さて、どうしてこれまでにも東京になれそめなかったのか、という素朴な疑問に対して、以下数行の説明がある。

「関西人の私に、東京は東北の南端なのだ。というより関東全体が北国としか、思えなかった。（…）京都の景色に、というよりたまたま下宿していた極めて京都らしい一画の中で、寺院の塀や植え込みに囲まれた視界に慣れ過ぎてしまっていたのだった―。そこでは四畳半風呂無しの住居に雪と湯豆腐を加えてしまえば、独居の退屈もなにか意味あり気になる。軽いものならば風邪や喉痛や鬱にも似た気分までが贅沢に変わる。なるほど、熱帯夜に窓を開けられずに、部屋全体に畳のワラのむれた臭いが立ち籠める辛い日もあったが、それでも花曇りも底冷えも盆地の夏も、寺院の佇まいや徒歩でいくらでも見に行ける美術品や、いつも幻の中にいるような哲学に適した街並みの前では、舞台効果のようなものになってしまったのだ。長年、無為を思索に変えてくれる街で暮らしていた。」（講談社、一九九三、講談社文庫、一九九八、三二―三三ページ、いずれも絶版）

が、それでも塞ぎ込むようになった、と続くのだが、このさすがに作家らしい京都寸評は、ストーリーに一瞬の美しさを添えるだけではなく、短期的に京都在住を経験している一読者としての私に深い感銘を与えてくれた。無為を思索に変えてくれる街とは、まさに京都、すくなくとも外部（東京、パリ）から見た京都である。第一に時間がまったく違う形で流れているような、従来の区切りが消滅してしまったような、雰囲気に浸った。

例えばこんな時。某四条通りのふとん屋で経験した会話。

「―　このお店古いんですか。
―　まあ。
―　昭和ですか。
―　いやあ。
―　大正ですか。
―　いやあ。
―　すると、明治ですか。
―　いやあ、もっと前やね。
―　えっ、江戸時代ですか。
―　ええ、まあ、綿を売っててねえ。」

今時 founded in 1996, since 2003 などがはびこっている中、なんたる謙遜。あるいは断固たる自信。二〇〇六年十二月二十三日というその会話の日が限りなく相対的な期日と変貌してしまった。他にも京都在住の友人の話では、年配の方の〝こないだの〟例えば火事は、という表現はなんと応仁の乱を指すことがしばしばとか。なるほどと思う。大震災や空襲にあった東京では考えられない通史的な感覚である。

実際、風景のほうも、随所に昔の面影を残している。この寺、神社、屋敷や旧民家などが点在する町が観光の発展で当たり前にはなっているものの、考えてみれば、過去と現代が闊ぎあうタイムスリップ的経験をそのまま提供してくれる、特別な場所

でもある。妙心寺の迷路に迷い、自分も江戸化してしまいそうな感覚に襲われたと思ったら、次の角では東映映画の撮影の真っ最中で、俳優さんたちが何度も監督の指示に従って同じ（他愛もない）シーンを演じていた。あるいは金閣寺。改めてその美しさに感動し、三島作品やらを思い浮かべていると、どかどかと五〇人あまりの写真家集団がやってきて、一斉に写真をとり始めた。全員初老の男性で、ハンチングのような服装に身をまとい、ものすごく高度な高級カメラの作業に熱中していた。引退後の何とかカメラ愛好家クラブの人たちは黙々と何千枚もの金閣寺の写真を延々と撮り続けた。被写体の金閣寺は、といえば、やはり艶やかにそびえ、なされるがままにしていた。

文豪谷崎潤一郎は京都が好きで、長く住み、永住するつもりでいた。実際そのお墓は銀閣寺に近い法然院というところにあり、自分で選んだ天然石に自分で書いた寂という字を刻ませて、そこを夫人とともに永眠の地とした。自分の老衰、そして死というものをアイロニーたっぷりに演出したのが小説「瘋癲老人日記」（一九六一-一九六二）で、私も数年前に、そのフランス語の改訳に携わったため、その凄まじい生命力を身近に感じた。以来、京都に寄れば、必ず一度はお墓参りに行くのだが、それは今でも、谷崎は永眠のふりをしながら、どこかで目を光らせているような幻想が無意識的にも翻訳の仕事の原動力となっているからかも知れない。ということで、今度もお伺いした訳だが、不思議なことにお墓のすぐ横には名刺入れの箱がある。実

はずっと前からファンのため？に、その箱は設置されていて、私も何度か名刺を置いてきた。言うまでもなく、何の音沙汰もなし、であったが。しかし、今回は名刺を置いて来なかった。それは、このような儀式はおかしいというような覚めた考えがあったからではない。ただ、今回の四ヶ月の京都滞在で使ってしまい、名刺が切れてしまったからである。それだけだが、亡くなった文豪のための一枚のほうが、他の何十枚の名刺よりも、意味があるのかもしれないと一瞬思った。

後世に残るものと残らないものの時には微妙な差を思いながら、帰途につく。しかし笙野説では京都が無為を思索に変えるという。ならば、本当にありがたい街に住んでいる人がうらやましい。つかの間であったとは言え、こんな幻／フィクションのような場所で、数ヶ月、人文科学研究所の研究員として過ごせたことは幸運であった。ありがたい気持ちでいっぱいだ。さて、無為な研究のほうは思索に変貌し得るのか。パリに戻ってからの新たな宿題である。

変貌するドイツの大学

ラインハルト・エメリヒ
（冨谷　至訳）

二〇〇六年九月から翌二〇〇七年二月まで、私は京都大学人文科学研究所客員教授としての光栄に浴した。学内行政面での義務は何もなく、実に刺激的な環境のもとで半年間、自身の研究に没頭できたばかりでなく、研究班への参加の機会、日本人の学生に対する講義、尊敬する同僚との忌憚のない談論は、楽しさを瀰増するものだった。私が自分の目で見た印象と、語り合ったことの一つは、日本の大学が、今日、大きな変革期に遭遇しているということである。これは、ドイツの大学にあっても同じい。そこで、私は、以下に変わりつつあるドイツの大学に関して、あらまし考えのいくつかを述べてみよう。主としてそれは人文科学に関してである。

伝統的制度の特色

（1）ドイツの大学は、ウィルヘルム・フォン・フンボルト（一七六七–一八三五）の二つの連関する理想に負っている。一つは、教育と研究は根底にあって互いに結びついていなければならないということ、今ひとつは、大学において研究と学業は、なんであれ現実的な目的の下に置かれるべきではないということである。一九世紀にあっては、ドイツの大学を実りあるものにした根底に横たわっていたかかるフンボルトの理想は、基本的には人文科学に限定されていたこと、言うまでもない。またかかる理想を引き継ぐ大学のシステムはごく少数の人間だけが大学に入学することを前提として、はじめて機能すること論をまたない。事実、第二次世界大戦まで、二〇世紀の前半の何十年間にわたって、大学に入学したのは、各世代の五％を超えなかったのである。

（2）ドイツの大学は異なった、固有の特色を有する傾向にはあるものの、教授と学生、および一般大衆の眼からみれば、大学は質においてあまり差がないと考えられている。アメリカ、日本で極めて自然となっている大学間の格差ランキングは、伝統的なドイツのシステムには、縁のないものであった。そこには、主として四つの理由があろう。

一は、最近に至るまで、ドイツには私立大学というものは無かったこと。二は、大学間には、給料の格差がほとんど無かったこと。三は、大学に入るには、各大学が実施する試験によるのではなく、選抜試験としては、高等学校での順位（Abitur）をもとに、大学自身ではなく他の第三者機関によって決定されるということ。そして、全体として多くのドイツの大学の質に差がないその第四の理由は、ごく最近にいたるまで授業料は概

ね払わなくてよかったという事実にも因っている。ドイツの大学が均質である結果として、明確に格付けが為されている国でそうであるように、学生は大学の名声に憧れて来るのではなしに、自分の適性能力にしたがって選択をおこなうことになる。

（3）ドイツでは、大学に入学するまでに、学生は、小学・中高学校で一三年間を経ねばならない。普通の学生の入学年齢は、二十歳、男子学生は高校卒業と大学入学の間に兵役もしくは社会奉仕があるが故、少し年がいってからと言うことになる。ドイツの大学入学年齢は、他のヨーロッパの国々に比べて相対的に高いといってよい。人文科学はどの分野も高度な専門性を有するが、伝統的に学生は、主専攻1、副専攻2を取らねばならず、五年もしくは六年の就学期間をへて単位取得認定となる。もし、学生に博士学位（PhD）を目指そうというほどの意欲があれば、高度に専門的な学問をさらに三年から五年間続けねばならない。

挑　戦

（1）かく概観した理想的なドイツの大学は、ある前提条件があって始めて成立すること、言うまでもない。前提条件の第一は、教授と学生双方が、外部からとやかく言われることなく、自分たちのすべきことに真摯に専念するという、積極的な気持ちをもっていることである。次に言えるのは、教授と学生の数がうまくバランスのとれた状態があってはじめて、研究と教育、教授と学生の間に理想的な緊密関係が生じるということである。

残念なことに、一九七〇年代以降、このバランスが大きく崩れてきたのである、つまり、以前にまして、より多くの若者が大学に入学しだしたのである。この傾向に対して、大学の教員をそれに相応して増加させることで、調整するということは、今日にいたるまで、なされないままである。さしあたり、アメリカのエリート大学アイビーリーグでは、教授一人に対しておよそ一〇人の学生、対して平均的なドイツの大学では教授一人にたいして五〇人から一〇〇人の学生という比率であり、人文科学にあっては、教授一人に対する学生の数はそれよりもっと多い。統計学でいう外挿法（既知の数値からの推定）によれば、ドイツの大学で今日二〇〇万人と算定される学生数は、向こう一〇年の間に、三五パーセントの増加となる。しかし、そこには、教員の増員の計画はない。大学を拡張するかわりに、独政府は教育の収容力を外国に〝買い求める〟と言ったことすら考えている。

（2）だいたい一九九〇年以来、大学入学の各世代の数のパーセンテージがドイツでは三六％にまで増加している。ただ、この比率はまだ低すぎると、しばしば指摘されてはいる。

事実、OECD（経済開発協力機構）加盟の先進国三〇カ国の平均比率（五三％）を下回り、アイスランド八三％、ニュージーランド八一％、スウェーデン八〇％といった国には、及びもつかない。

（3）これまでのドイツの大学のシステムからは、「大卒」

があまりにも少ないとの主張は、甘受せざるをえない。先に述べたごとき自由さゆえに、何人かのというよりも、おそらくは多きにすぎるとも言える学生は、卒業せずに大学にとどまる。卒業して大学を去る学生の数は、ここ二〇年の間に増加して、現在は各年代の二一％に上ってはいるが、それでもＯＥＣＤの平均三二％には、とうてい及ばない。

（４） 一九九三年、ＥＵ（欧州連合）として結成された二七国のグループは、それぞれの国には文化的多様性があるべきだが、連合は、ヨーロパの文化的、政治的、経済的生活において、ある分野において多様な思想の調和をはかるという確認――「In varietate concordia 多様性の統合」という銘を掲げて――が調印された。中でも主たる分野は教育であり、何人かの政治指導者は、ヨーロッパ内の教育の多様性、とりわけ大学内でのそれが、一般的にＥＵとして不利益をもたらすと考えたのである。その結果、いわゆるボローニャ協定において、学期、就学年数、そして試験の難度と評価段階を統一することを合意した。これによって、ヨーロッパ内でのヨーロッパ学生の流動性、競争原理、さらには国際的雇用を高揚することをめざしたのである。

ボローニャ協定によって規定された過程、もはやその歯車を逆転させることはできないように思われる。そしてそれは既述の伝統的ドイツの大学には革命的影響をあたえることになろう。(1)修士課程（ＭＡ）は、最初の高レベルの単位取得ではなくな

り、かわって全ての学生は、ＭＡを目指すことが認められる前に、学士（ＢＡ）と称される一段下の単位取得認定を経ねばならない。(2)ＢＡ単位取得の就学期間は、短縮され、カリキュラムは実学関連の科目に集約されるであろう。(3)大部分の学生は、ＢＡを取得してしまえば、大学をはなれ、ごく少数のグループだけが、ＭＡとして残ることが許されることになろう。(4)これからのヨーロッパの学生は、少なくとも二、三校の大学で学ぶべきものとされ、個性的な指導者（メントル）もユニークなテストもなく、もはやフンボルトの理想に従うのではなくして、ただただ実学のみを学ぶことになろう。

（５） ヨーロッパ、とりわけドイツにおいては、これまでのシステムには、競争が欠如しているという確信が大きくなってきた。畢竟、大学に市場原理を適用することがだんだん顕著になってきたことが、目につく。概して言えば、ある大学が多くの予算を獲得すれば、それだけその大学の重要性が増すと見なされる。これは、同時に大学内部での競争においても当てはまり、ある学部が多くの予算を獲得すればそれだけ、そこの構成員が重宝されるということに他ならない。

人文学への挑戦

以上、述べてきた挑戦は、とりわけ人文科学にとって脅威であること、容易に理解できるであろう。

（１） 人文科学という学問がどういうものかというのは、他の学問分野にくらべて、明確ではなく、人文科学の教授は、言

葉の真の意味において研究者とは考えられていない場合が、しばしばである。

（2）人文科学を専攻した学生の学んできたことが将来どう生かされるのかは、自然科学や工学を卒業した学生の将来よりも不確かである。

（3）他の分野の学生と比べて、人文科学出身の学生の方が、学問をやめてしまう者がおおい。

（4）財団等から獲得した予算の額が優秀さの指標として見なされる限り、人文科学が申請する額が常に自然科学における申請額よりはるかに少ないがゆえ、人文科学の立場は低い。

ドイツにおいて我々が直面している大学改革は、何十年ものあいだドイツの大学を支えてきた人文科学にとって脅威となっている。より正確にいえば、人文科学のある分野では、一層の危機に面している。それらは、いくつかの大学で、たった一人か二人しか教授がいない領域であり、しばしばそれらの領域は非ヨーロッパ文化に関するところに他ならない。多くの大学は、次第にこういた領域を廃止しつつあり、不幸なことに、研究者や大学教授の中においてさえ、次の様な考えをもつ者がいる。ヨーロッパが世界文化の発祥であり、したがって非ヨーロッパを研究しそれを教えるといったようなことは、ヨーロッパの大学はする必要などなく、他に任せておけばよい。かかるヨーロッパ中心主義の再来が長続きしないことを願ってやまない。

講演

夏期公開講座「名作再読」

読書する女

——メタ文学としての『ボヴァリー夫人』

大浦康介

「名作再読」と銘打った二〇〇六年度の夏期講座で、私はギュスターヴ・フロベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げた。奇しくもこの年は『ボヴァリー夫人』の初出（『パリ評論』一八五六年）から数えて一五〇年目にあたる。この作品の名作たるゆえんは何か。またこの作品はいかなる意味で西洋文学のモダニティーを先鋭的に体現しているか。私はこれらの問いを導きの糸として、（1）『ボヴァリー夫人』の作品世界、（2）ヒロインの人物造型、（3）作品のメタ文学的二重構造という観点から分析を試みた。

（1）にかんして特筆すべきは、副次的人物（オメー、ルウルー、ジュスタン、盲人の物乞い）の活用と、ある種の映画的技法を先取りするかのようなステレオフォニック、ポリフォニックな語りの技法（ルドルフが共進会でエンマを誘惑するシーンなど）である。これらをつうじてフロベールは、細部にまで神経のゆきとどいた、立体的、力動的な（動く建築物ともいうべき）作品世界を構築している。このことは、しばしばその「客観性」が強調されるフロベールの作品世界はじつはきわめて周到に演出された「人為的」世界だということでもある。

（2）フロベールの人物造型は往々にして典型（アーキタイプ）の創出へと向かう。その最たる例がヒロイン、エンマ・ボヴァリーの造型である。これは周知のように「ボヴァリスム」という一種の流行語を生んだ。名付け親ともいうべきジュール・ド・ゴルチエはこれを「自分のことを自分とはちがう誰かとして考える能

力」と定義している。後世の論者はこの概念をいたずらに普遍化することでそこに内包される「女性性」を削ぎ落とした観があるが、エンマの人物造型は「読書する女」の表象伝統（とくに絵画における）と分かちがたく結びついている。

（3）『ボヴァリー夫人』はなるほど「幼い頃から小説に親しみ、いつも夢みがちで、現実を直視できず、それがもとで身の破滅をまねく女性」についての小説である。つまりは小説を読む女についての小説、（想像力を基本にみる）文学についての文学である。フロベールは『ボヴァリー夫人』によって、自己反省的な文学というすぐれて近代的な課題を引き受けるとともに、そこに（不幸な）女性の表象を重ね合わせることで独自のアイロニーを実践したのだといえるだろう。

『坊っちゃん』と『風の又三郎』

——貴種流離譚としての読み比べ

高橋世織

宮沢賢治は文壇とほとんど没交渉であったために生前は未発表の作品が多く、ある意味で純粋に書く行為ができました。漱石も当初は英文学者、東大の教師でしたが、書くことに没頭できる道を選び四〇歳で転職、亡くなるまでの一〇年間、新聞メディア（東京朝日新聞）に小説を連載し続けました。この二人には意外なほど共通項が多いのです。

①共に英国病、英国趣味、②短い間の教師体験、③アマチュアリズムを尊重④宗教観（禅宗、法華経）⑤反自然主義の文学観、⑥死のテーマ、死の体験（子規、トシ）⑦未完成（明暗、銀河鉄道の夜）⑧サイエンス・リテラシー、⑨旺盛なメディア意識

世代的には、賢治は漱石チルドレンに当ります。『坊っちゃん』も『風の又三郎』も学園小説、学園モノの走りです。前者は教師、後者は学童の視点から学校空間とそれを取り巻く社会や自然を、外部からの闖

入者の視点でもって語られています。その闖入者は、異文化を身に纏っているため、閉塞した共同体に波風を与え風穴を開けて、やがてまた立ち去ってしまいます。この闖入者こそ、物語の主人公なのです。

物語理論で主人公の定義を、例えばYu. ロトマンという人は、トポロジー的に越境行為をする人物と規定しました。柳田國男は〈流され王〉、折口信夫は〈貴種流離譚〉という枠組みで考察しました。この二人は民俗学者ですが、ほぼ同時期にそれを考え付いたのです。この三人の考え方は、概ね共通していて、現実界Aから異世界Bに主人公は入り、やがてその異界を離脱して、元の現実界A′に戻ってくる、という構造を物語りは基本的にとるというのです。ここで、大事なのは、主人公の越境行為によって現実界AがA′に変わる、変えて見せるということです。『風の又三郎』の場合は、村童たちの居るところへ闖入者＝又三郎がやってくるので、「桃太郎」や「浦島太郎」のように〈異界滞留譚〉という言い方になるかもしれません。

では、なぜこうした、現実を異化してみせる物語の構造が出来上がったのでしょうか。我々には現実世界というものをなかなか見極める事が容易ではありません。標準レンズ的な正面鏡に映し出すよりも、三叉路にある凸面鏡のような歪みをもった鏡に映し出した方が、現実の特徴がより強調されて本質が見えてくるのです。物語りの〈語り〉は、本来なら〈騙り〉と記した方が正しいでしょう。つまり、〈騙す〉ということなのです。言語構造の世界に歪みを持たせることで、現実というものの本質を教え、気づかせ伝えるのが物語りという言説装置の一つの大きな役割、機能なのです。

さて、この二つの名作に共通する魅力の最たるものは、〈声〉やざわめきの魅力がたっぷり語られ、描かれている点でしょう。『坊っちゃん』九章の〈胴間声〉など、謡や落語に精通した漱石ならではのくだりです。『風の又三郎』に関しましては、〈風言語のミュージカル〉として、一種の風の精霊による歌物語として読むことも可能なのです（拙稿参照『近代日本文学のすすめ』岩波文庫別冊13）。

『論語』のなかの物語

金　文京

孔子は、言うまでもなく中国を代表する思想家、偉人である。その孔子の生涯を知るためにもっとも重要な資料は、これまた言うまでもなく、その言行を記録した書物、『論語』である。ただし『論語』は年代を追って編集されていないため、個々の言行がいつ、どこでのものなのかを知ることができない場合がほとんどである。たとえば冒頭の、「子曰く、学びて時に習う、また説(よろこ)しからずや」に始まる一節も、どのような状況での発言なのか明らかでない。むろんそんなことは分からなくとも、我々は孔子のこの言葉を一般的教訓として味わうことができる。しかし中には、背景が不明であるため、なんのことか分からない場合もなくはない。

たとえば、「子謂く、公冶長は妻(めあわ)すべきなり。縲絏(るいせつ)（牢屋）の中にあるといえども、その罪に非ざるなり。その子をもってこれに妻す」（公冶長篇）、つまり孔子の弟子の公冶長が牢屋に入っていたが、孔子は濡れ衣だと言って、自分の婿にしたというのであるが、公冶長はなぜ牢屋に入れられたのか、また孔子はどうして彼が無罪であると知ったのか、これだけではなにも分からない。しかも歴代の『論語』の注釈は山ほどあるが、この疑問にはまったく答えてくれないのである。唯一の例外は、六世紀の人、梁の皇侃の『論語集解義疏』で、そこでは、公冶長は鳥の言葉が分かるという特殊な才能があったため、ある殺人事件に巻き込まれ逮捕されたが、後に鳥の言葉が分かるということが証明されたので釈放されたという話を載せている。この荒唐無稽な話は、むろん事実とは思えないが、とにかくも『論語』の右の条の説明にはなっているであろう。

『論語集解義疏』は中国では早くになくなってしまったが、日本に伝わった本が十八世紀に中国に逆輸入されたことで有名である。ただし公冶長が鳥の言葉を解すという話は、内容を少し変えながらも、その後、明代の類書や最近の民話にまで伝わっている。また日本でもさまざまな記録があり、もっとも新しいものでは、明治の思想家、幸徳秋水の「鳥語伝（公冶長物語）」（『萬朝報』明治三五年十一月一日の社説）がこの話を扱っている。

鳥の言葉を解すという話は世界中の民話、伝説にみられるが、『論語』の記述が簡略すぎるため、だれかが民話を利用して、こんな奇想天外な話をでっち上げたのであろう。同じような例としては、「後生畏るべし」（子罕篇）について、孔子が項託という子供と問答をして言い負かされたという話を記す、敦煌発見の「孔子項託相問書」がある。

『論語』は一般に教訓書として読まれているが、中には右の例のようによく分からないことも書いてある。そこから自分なりの物語を想像しながら読んでみるのも一興であろう。

開所記念講演

公債・年金・いのち

坂本　優一郎

一八世紀イギリスでは、各地で「公共的プロジェクト」が数多く推進された。その大部分は、運河の掘削、ターンパイク（有料道路）の建設、道路の舗装、橋梁の敷設、街灯の設置、公園の整備、ドックや埠頭などの港湾設備の造成といった、社会的インフラストラクチャにかかわるものであった。各事業の主体となったのは、議会制定法によって授権され、組織化された「トラスト」である。

それぞれの事業では莫大な費用が必要とされた。しかし、当時の政府歳出の大部分は対仏戦争の公債の利払いと償還費に充てられており、中央政府による「公共的プロジェクト」へ財政的支援はほとんどなかった。

そのため、トラストの多くでは、事業ごとに「公」債が起債され、地方税や各事業の収益が利払いに充当された。これらに投資したのは、中央政府の積極財政によって生み出された、公債などの証券を資産として活用する人びとであった。

つまり、18世紀のイギリスでは、中央でも地方でも、「公」的な事業―対仏戦争であれ、地方インフラ整備であれ―の「証券化」がおこなわれたのだ。リスクを分散化し、証券投資に関心をもつ人びとからなる「投資社会」に働きかけ、その「遊休資金」を流動化することから、各事業の原資が獲得されたといえる。こうしてイギリスは、「投資社会」の勃興と拡大によって、大西洋帝国から国内のローカルな社会にいたる空間群の整備・構築に成功した。これらの空間群こそが、商業・製造業の飛躍的発展の前提条件となったのである。

ここで重要なのは、証券化が「年金 annuity」というかたちをとったことだ。証券の多くは、「トンチン公債」のように、名義人が生存しているかぎり利払いが継続されるという、事実上の「終身年金」としての性格を帯びていた。そのため、一八世紀のイギリスでは、「いのち」という時間が投資という視点から意識されていく。とはいえ、「いのち」なる時間はもっとも予測しがたい時間でもあった。そこで「投資社会」の成長に並行して、「いのち」を神の領域からとりだし、客観的に予測しようとする動きが出てくる。当時、飛躍的な発展を遂げつつあった確率研究や、社会的・政治的問題となっていた人口推計の試みとリンクしながら、平均余命が地域・性別・年齢ごとに推計される。これが「年金」を求める証券投資の科学的な合理化―予測可能性の獲得―の背景となっていったのだ。

講演では、ロンドン近郊のミドルセクス州における監獄建設を、事業の具体例として取り上げた。個人の「いのち」という時間が具体的な空間として可視化され、また、空間を構築するプロジェクトが証券化によって「いのち」なる時間に姿を変えていく。こうした空間の構築と「いのち」という時間との相互関係をとらえるには、「投資社会」の勃興という視点が不可欠なのである。

ゲノム時代の人間

――個の差異と社会における連帯の間（はざま）で

加藤和人

人間の遺伝情報の全体である「ヒトゲノム」を解読する「ヒトゲノムプロジェクト」が、一九九〇年代から二一世紀の初めにかけて行われていたことを覚えている人は、どのくらいいるだろうか。そう言えばそんな話があったな、という人もいれば、そもそもよく知らないという人もいるだろう。

いずれにしても、「ヒトゲノム」は過去のものとなった感がある。

研究の現場では、実はこうしたイメージとはまったく反対に、ヒトのゲノムを調べる研究が活発に進められている。二〇〇四年に終了した「ヒトゲノムプロジェクト」では、ヒトのゲノムについての基礎的な情報を得るために、少数の匿名ボランティアの試料を解析し、全塩基配列を解読した。これに対し現在は、それよりもはるかに多数の何万人、何十万人の人からDNAを提供してもらい、個人の違いを調べる研究が進められている。

例えば、イギリスでは五〇万人の国民から試料を集めることを目指す「UKバイオバンク」というプロジェクトが始まっており、日本でも三〇万人を目標にした事業が二〇〇三年から始まっている。それらの目的は、多数の人のゲノム解析の結果と病気の発症などの情報を組み合わせて、病気のなり易さや薬の利きやすさなどの違いのもとになるゲノム上の違い（つまりそれを構成する遺伝子の違い）を見つけることである。こうした分野の研究成果をもとに、東大病院などでは、薬の処方を個人ごとに変えるシステムが試行的に動き始めている。

当然のことながら、ゲノムの違いは個人の違いのすべてではない。特に健康状態に関しては、生活習慣などの環境要因の役割は大きい。だが、ヒトゲノムの個人差が詳しく解明される時代になるにつれ、個人の違いを前提にした社会のシステム作りが必要とされる場面が増える可能性がある。遺伝子の違いが原因で、日本人の五割はお酒に強く、四割は弱く、一割はまったく飲めない。その事実を明確に意識した際に、どのように社会が変わるだろうか。

また、多数の人の研究協力が必要になるにつれて、研究への参加を単なる自己決定だけにゆだねるのでは

なく、「社会における連帯」という意識を持って理解しよう、という意見も出されている。個人のゲノムは家族・血縁者のゲノムと共通性がある。自分が研究に協力すれば、それらの人々が恩恵を受ける。そうした事実をもとに「連帯」という概念が持ち出された。それに対し、「連帯」を理由に個人の自由な行動に介入するのは問題であるという議論が出ているのは当然のことだろう。

ヒトゲノムの理解は、単なる医学・医療の問題を超え、個人の差異の意味や社会における個人のあり方といった、より大きな問題に広い視野から取り組むことを要求している。

望楼、楼閣から高塔へ

――中国仏塔の成立――

田中　淡

日本や朝鮮ではほとんど唯一の類型である三重塔・五重塔など多層塔の形式は、古代中国における数種の仏塔類型のうちの一形式の模倣であって、さらにその原型はインドのストゥーパの構成要素の一部を採用した結果であることもすでに定説となっている。ただ、中国仏塔の最初期における成立の背景には、必ずしも仏教寺院に限らない中国建築特有の歴史と伝統が反映していることも事実である。

中国における仏寺の造営として文献上確実に知られる最古の事例は、後漢時代末に笮融が徐州に建てた浮図祠で、金色の銅像を祀り「九重の銅槃を垂らし、重楼閣道（重層の楼閣・回廊）に作り、三千人を収容できた」（『呉志』劉繇伝）と伝える。後世の仏塔の相輪に相当する部分を屋頂に戴き、殿内には本尊を祀る楼閣建築で、後世の仏寺における仏殿と仏塔の機能を併せもつ建築であった。その外観も内部も、ストゥーパの傘蓋をシンボル化して屋根に用いている点を除けば、主体構造は中国固有の木造楼閣を採用しており、中国仏塔は最初期からすでにインドの原型からは遠く隔たるものであった。この初期仏塔の成立の背景には、前漢武帝が建章宮に建てた神明台・井幹楼を契機とする楼閣建築の流行があった。後漢以降に出土遺物が急増する高塔形式の明器陶楼をみても、当時は中国建築史の大きな転換点であったことは疑いない。

一方、古代中国の「楼」には両義あり、一般的な重層建物の意のほか、銃眼のように窓孔をぽつぽつと開けた重厚な望楼あるいは角楼を表すとする字書がある（『爾雅』、『釈名』）。後世の実例でいえば北京城の外城徳勝門箭楼、内城東南角楼の類である。『考工記』、『墨子』や馬王堆三号墓出土の帛書の記載や地形図の描写などからみても、防御性の重層城楼こそ古来の楼の原型であったことは推測に難くない。

中国の初期仏塔が成立する時期は、古代高層建築の主流が、台榭から楼閣へ、土木混造から木造へと移行する転換期とちょうど重なり合っている。ストゥーパの細部を換骨奪胎した外観の特徴だけでなく、後世にいたるまで自律的で、排他的とさえいえる特質を頑なに守り続けた中国建築の伝統が、主体構造の変遷を通してみても、初期の段階から明確にみとめられる事実は注意すべきであろう。

彙報

訃報

。FORTE, Antonino 文化研究創成研究部門客員教授（六五歳）は、七月二二日逝去。
。柳田聖山名誉教授（八三歳）は、十一月八日逝去。
。古屋哲夫名誉教授（七五歳）は、十二月二日逝去。
。尾崎雄二郎名誉教授（八十歳）は、十二月八日逝去。

人のうごき

。籠谷直人助教授（人文学研究部）は当研究所教授（人文学研究部）に昇任（四月一日付）。
。FORTE, Antonino ナポリ東洋大学教授・イタリア国立東方学研究所長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇七年三月三十一日）。
。LACHAUD, Fransois フランス極東学院京都支部長は、客員助教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇〇七年三月三十一日）。
。古勝隆一千葉大学大学院助教授を助教授（東方学研究部）に採用（十月一日付）。
。向井佑介氏を助手（附属漢字情報研究センター）に採用（十二月一日付）。
。佐野誠子（東方学研究部）助手は辞任（二〇〇七年三月三十一日付）の上、和光大学表現学部講師就任。

海外での研究活動

。王寺賢太助教授（人文学研究部）は、三月十八日大阪発、フランス国立図書館、国際哲学コレージュ、パリ第一ソルボンヌ大学に於いて学術協定打合せ及び十八世紀フランス歴史叙述についての調査・研究を行い、四月八日帰国。
。籠谷直人教授（人文学研究部）は、四月六日大阪発、香港大学アジア研究センターに於いて、セミナー「アジア的視点からの香港と日本について」にて報告を行い、四月八日帰国。
。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月五日大阪発、マリオット・ホテルに於いてアメリカ・アジア学会国際会議へ出席し、軍事史研究所に於いてアメリカ軍の式典についての資料調査を行い、四月十五日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、四月十七日大阪発、米国議会図書館、メトロポリタン美術館に於いて、漢字文献保存状況の調査を行い、四月二十五日帰国。
。大浦康介教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、四月二十一日大阪発、フランス社会科学高等研究院並びにパリ第七大学、フランス国立図書館に於いて、フィクション研究に関するセミナーに出席し研究打合せ及び資料収集を行い、五月四日帰国。
。加藤和人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月十六日大阪発、ソウルＣＯＥＸに

於いて「Public Communication of Science and Technology」に出席及び発表を行い、五月二十一日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、五月二十日大阪発、上海師範大學に於いて「敦煌の民族と言語」・「日本敦煌學簡史」についての講演を行い、五月二十五日帰国。
。富永茂樹教授（人文学研究部）は、五月十五日大阪発、グルベンキアン文化センターパリに於いて、「京都―リスボン、都市の憂鬱」について講演を行い、国立図書館で資料収集を行って、五月二十八日帰国。
。菊地暁助手（人文学研究部）は、五月二六日大阪発、韓国学中央研究院に於いて、地域資源としての〈景観〉の保全ならびに活用に関する研究会に参加、江陵端午祭にて世界無形遺産登録江陵の現地調査を行い、五月三十一日帰国。
。加藤和人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、五月三十日大阪発、ヘルシンキ・フェアセンターに於いて、ヒトゲノム国際機構（HUGO）第十一回年会にて研究発表及び理論委員会に出席し、六月四日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、六月十五日大阪発、キヨソネ美術館に於いて所藏の漢籍の調査を行い、六月二十日帰国。
。高木博志助教授（人文学研究部）は、六月十八日大阪発、慶尚南道統営群閑山面に於いて、壬辰倭乱をめぐる国際シンポジウムへ参加し、六月二十二日帰国。
。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、四月五日成田発、マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学に於いて、人種・人種主義と科学との関係について研究を行い、渡航中、文部科学省科学研究補助金により、六月十二日～十五日・六月二十二日～二十八日、ニューヨーク州立大学、ハーレム・スタジオ・ミュージックアジア系アメリカ人アートセンター、ワシントン大学に於いて、人種の表象と表現の研究に関する資料収集を行い、六月三十日帰国。
。水野直樹教授（人文学研究部）は、七月二日大阪発、延世大学校、忠清南道に於いて、延世大学校国学研究院主催国際学術大会に参加及び発表を行い、七月八日帰国。
。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、六月三十日大阪発、チュビンゲン大学、ソルボンヌ大学に於いて、研究打合わせ及び国際人文情報学会への出席・研究報告を行い、七月十一日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、七月四日大阪発、ロシア科学院東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支所に於いて敦煌学国際検討会の打合せ及びロシア所藏漢字文献の調査を行い、七月十二日帰国。
。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月九日大阪発、エディンバラ大学に於いて、第十三回世界サンスクリット会議に出席し、七月十六日帰国。
。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、七月十七日大阪発、中華仏学研究所およ

び中華電子仏典協会に於いて出講、研究打合せを行い、七月二十六日帰国。
。曾布川寛教授（東方学研究部）は、七月三十日大阪発、太原市文物考古研究所、山西省博物館、北京大学に於いて中国美術の調査と資料蒐集を行い、八月三日帰国。
。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月一日大阪発、香港城市大学、海豊県県誌弁公室に於いて、中国広東省に分布するショオ語の研究打合せ、現地調査および資料収集を行い、八月十七日帰国。
。冨谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月八日大阪発、ストックホルム大学及びライデン大学に於いて科学研究費基盤研究Sの開始に伴う研究打合わせを行い、八月十八日帰国。
。坂本優一郎助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月八日大阪発、ロンドン・メトロポリタン・アーカイヴズに於いて公債起債関係資料の調査を行い、八月二十四日帰国。
。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、八月十三日大阪発、寧波大学、双嶼港、馬喬博物館等に於いて東アジア海域交流と日本伝統文化に関するフィールド調査及び資料収集を行い、八月二十四日帰国。
。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月三十一日大阪発、中央民俗大学及び西南民俗大学に於いて西南中国の言語にかんする文献調査及び康定近郊にてムニャ語とリュズ語の調査を行い、八月二十五日帰国。
。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十三日大阪発、山西省考古研究所、山西博物院、北京大学等に於いて北魏文物、雲岡石窟・平城遺跡の調査を行い、八月二十六日帰国。
。籠谷直人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月十九日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて第十四回国際経済史学会に参加、研究報告し、八月二十八日帰国。
。古松崇志助手（東方学研究部）は、八月二十二日大阪発、北京に於いて、総合地球環境学研究所との共同研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明」のため歴史遺跡及び現状についてフィールド調査及び資料収集を行い、八月二十七日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、科学技術振興調整費により、八月十八日大阪発、山西省社会科学院、近代史研究所に於いて、山西省、北京市、河北省における環境問題調査および国際学会「一九一〇年代の中国」に参加し、八月三十日帰国。
。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、科学技術振興調整費により、八月十八日大阪発、山西省社会科学院、近代史研究所に於いて、山西省、北京市、河北省における環境問題調査および国際学会「一九一〇年代の中国」に参加し、八月三十日帰国。
。宮紀子助手（東方学研究部）は、八月二十二日大阪発、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギスタン、中国に於いて、総合地球環境学研究所との共同

研究プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明」のため歴史遺跡及び現状についてフィールド調査を行い、九月六日帰国。
。田辺明生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月三十一日大阪発、ブバネーシュワル及びプリー近郊に於いて、民主化にともなう社会変容についてのフィールド調査、デリー大学に於いてインド民主主義に関する研究打合せ、資料収集を行い、九月九日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月七日大阪発、社会科学院近代史研究所及び新河県政府に於いて中国県制に関する調査、資料収集を行い、九月十三日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月七日大阪発、南京師範大学、上海図書館に於いて「転型期的敦煌学―継承興発展」国際学術検討会出席、漢字文献の調査を行い、九月十三日帰国。
。王寺賢太助教授（人文学研究部）は、九月九日大阪発、トロワリヴィェール大学、ケベック大学に於いて国際十八世紀学会若手セミナー『啓蒙と歴史』に参加し、九月十八日帰国。
。倉島哲助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二十二日大阪発、上海第二工業大学、新郷市、上海市に於いて、現地における武術の実践に関する調査を行い、九月十八日帰国。
。池田巧助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月九日大阪発、カルフォルニア大学、ワシントン大学に於いてチベット・ビルマ語のデータベース利用に関する打合せ及び第三九回国際漢藏語学会に参加し、九月十九日帰国。
。李昇燁助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十八日大阪発、大韓民国政府・国家記録院に於いて戦前朝鮮における民族問題に関する資料調査を行い、九月二十三日帰国。
。岩井茂樹教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十一日大阪発、中国社会学院歴史研究所、第一歴史檔案館、南開大学、国家図書館に於いて、学術講演および資料調査を行い、九月二十四日帰国。
。冨谷至教授（東方学研究部）は、九月二十一日大阪発、ソウル市内、忠北大学に於いて、「張家山漢簡、二年律令及び韓国の法制」に関する学術大会に出席及び研究発表し、九月二十四日帰国。
。齋藤智寛助手（附属漢字情報研究センター）は、八月二十七日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて資料調査、研究打合せを行い、九月二十五日帰国。
。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十一日大阪発、スタンフォード大学フーバー研究所、国立公文書館、ワシントン大学に於いて、中国社会主義

運動に関する資料調査及び研究打合せを行い、九月二十六日帰国。
。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二十一日大阪発、ロンドン大学、ランカスター大学に於いて、インド系移民調査、「Gender and Spirtual Praxisin Asian Contexts Conference」に出席し、ヘブライ・エルサレム大学に於いて「War and Peace in Asia」国際会議にて講演し、十月六日帰国。
。久保昭博助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月四日大阪発、テアトル・ド・ラ・マニュファクチュール、フランス国立図書館に於いて、レーモン・クノー国際シンポジウム出席及び研究発表と文学理論に関する資料収集を行い、十月十五日帰国。
。大浦康介教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月十八日大阪発、社会科学高等研究院に於いて、GDR全体会議に出席し、フィクション論関係資料収集行い、十月二十四日帰国。
。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二十五日大阪発、シンガポール大学及びビンタン地方に於いて、東アジアのインド人移民についての国際会議に出席し、シンガポールとインドネシアの関係について現地調査を行い、十月三十日帰国。
。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月三日大阪発、ミュンスター大学、ベルリン国家図書館に於いて漢字研究ナレッジベースについての研究打合せと資料収集及び出講、ヴィクトリア大学に於いて「TEIのメムバース・ミーティング二〇〇六年」出席、TEIの国際化について研究打合せを行い、十一月一日帰国。
。船山徹助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月三十日大阪発、人民大学に於いて中国仏教史に関する資料収集と打合せ及び中日仏学会議に出席・研究発表し、十一月四日帰国。
。高木博志助教授（人文学研究部）は、十月二十九日大阪発、オーストリア国立図書館、ユダヤ博物館、世界遺産地区、オーストリア抵抗史料研究所に於いて、共同研究「国民国家の比較史的研究」に関する調査を行い、十一月四日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、科学技術振興調整費により、十月三十日大阪発、復旦大学、浙江交通運輸建設股份有限公司に於いて中国環境問題に関する研究打合せ及び中国交通環境に関する調査を行い、十一月五日帰国。
。齋藤智寛助手（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二十六日大阪発、雲林科技大学漢学資料整理研究所、竜山寺、国家図書館に於いて、「二〇〇六年漢字研究国際学術検討会」に出席し、仏教および道教信仰に関する研究の現地調査、資料収集を行い、十一月五日帰国。
。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月二十六日成田発、ハーバード大学に

於いて、「人種概念の普遍性」英語版出版打合せ、アジア協会、カルフォルニア大学アーヴァイン校、筑波大学に於いて、アジア系アメリカ人に関する資料収集を行い、十一月九日帰国。
。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、科学技術振興調整費により、十一月三日大阪発、新会市内、中山市内、香格里拉大酒店に於いて、広東省における環境調査及び「紀念孫中山誕辰一四〇周年学術討論会」に出席、研究報告を行い、十一月九日帰国。
。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十一日大阪発、中山大学に於いてシンポジウム「境界のないアジア」に参加し、十一月十四日帰国。
。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十六日大阪発、大田市内、忠南大学校に於いて、韓国社会史学会に参加及び資料調査を行い、十一月二十一日帰国。
。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十八日大阪発、インド考古局、マハラジャ・サラジラオ大学東洋研究所、Lal Chand学術図書館に於いて、ヴェーダ文献伝承の現地調査を行い、十一月二十六日帰国。
。山崎岳助手（附属漢字情報研究センター）は、十一月二十一日大阪発、ホテル・インターコンチネンタル・マニラ、フィリピン国立図書館に於いて、IAHAにおける学術報告及び十六世紀の華人に関する資料調査を行い、十一月二十七日帰国。
。佐野誠子助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月五日大阪発、北京大学に於いて六朝文学国際研究会議へ参加及び研究発表を行い、十二月九日帰国。
。金文京教授（東方学研究部）は、十二月七日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて、俗文学学術研討会に参加及び基調講演を行い、十二月九日帰国。
。王寺賢太助教授（人文学研究部）は、十二月九日大阪発、フランス国立図書館に於いてコロック「レナルとそのネットワーク」に参加し、十二月二十三日帰国。
。岡田暁生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月十九日大阪発、バイエルン国立図書館に於いて、十九世紀の音楽史関係の資料調査を行い、十二月二十六日帰国。
。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二十四日大阪発、長榮中學図書館に於いて、表音文字による中國語資料の調査を行い、十二月二十九日帰国。
。森時彦教授（東方学研究部）は、科学技術振興調整費により、十二月二十一日大阪発、上海市档案館、徐州師範大学、青島市档案館等に於いて、中国環境問題に関する調査・研究打合せ・資料収集を行い、十二月三十日帰国。
。坂本優一郎助手（人文学研究部）は、二〇〇七年一月一日大阪発、メトロポリタン・アーカイブズに於いて、年金証券関係資料の調査を行い、二〇〇七年一月五日帰国。
。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文

部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年一月十八日大阪発、香港中文大学に於いて、言語接触に関する資料収集及び第七回国際客家方言研討会に出席・研究発表し、二〇〇七年一月二十一日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、二〇〇七年一月二一日大阪発、クラコフ大学に於いて、クラコフ大学ヤジエロンスカ図書館所蔵漢籍の調査研究を行い、二〇〇七年一月二十八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、二〇〇七年一月七日大阪発、コンボ市内、シンガポール市内に於いて、インド系マイノリティ研究についての調査を行い、二〇〇七年二月二日帰国。

。田中淡教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月二日大阪発、板橋林家花園、自然科学博物館、彰化孔廟等に於いて、中国造園・園芸・農業史及び建築・生活技術史等に関する実地調査を行い、二〇〇七年二月六日帰国。

。稲葉穣助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年一月二十九日大阪発、大英図書館、オックスフォード大学に於いて、中央アジアにおける宗教史についての資料調査を行い、二〇〇七年二月八日帰国。

。高井たかね助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月二日大阪発、板橋林家花園、自然科学博物館、彰化孔廟、国立歴史博物館等に於いて、中国造園・園芸・農業史及び建築・生活技術史等に関する実地調査・資料収集、国立故宮博物館に於いて「開創典範—北宋的芸術興文化」研討会出席し、二〇〇七年二月六日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究部）は、二〇〇七年二月六日大阪発、故宮博物院、中央研究院歴史語言研究所、北京市内に於いて、中国美術に関する調査・資料収集及び北宋芸術と文化研討会に出席し、二〇〇七年二月九日帰国。

。田辺明生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年一月三十一日大阪発、ウトカル大学及び市街地と近郊村落に於いて、インド・オリッサにおける人種とカーストの代表的表象に関する研究を行い、ペラデニア大学に於いてスリランカの宗教実践における人・モノ・言葉のネットワークの研究を行い、二〇〇七年二月十九日帰国。

。岡田暁生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月十二日大阪発、ナポリ音楽院図書館に於いて十八世紀のイタリア・オペラの資料収集、バイエルン国立図書館に於いて第一次大戦期の音楽雑誌の調査を行い、二〇〇七年二月十九日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月十七日大阪発、常州市及び近郊に於いて、中国県制に関する現地調査を行い、二〇〇七年二月二十一日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月十七日大阪発、成均館大学、鎮安郡歴史博物館等に於いて研究に関する資料調査を行い、二〇〇七年

二月二十三日帰国。

。安岡孝一助教授（東方学研究部）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇七年二月十二日大阪発、ロサンゼルス公立図書館、サウスパサデナ公立図書館に於いて、文字コードとキー配列に関する所蔵調査を行い、二〇〇七年二月二十五日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月十九日大阪発、ロシア科学アカデミー東洋学研究所に於いて、敦煌寫本他の調査研究を行い、二〇〇七年二月二十六日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月二十六日大阪発、ソウル国立中央博物館に於いて、博物館展示と所蔵文書調査及び展示の比較史研究を行い、二〇〇七年二月二十八日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月二十一日大阪発、香港城市大学及び恵東県大湖洋村に於いて、研究打合せ、旧正月の祭りと言語の調査及び資料収集を行い、二〇〇七年三月二日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究補助金により、二〇〇七年二月二十二日大阪発、スタンフォード大学、陸軍歴史研究所等に於いて、軍隊の歴史人類に関する文献収集を行い、二〇〇七年三月三日帰国。

。石川禎浩助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇七年二月二十八日大阪発、四川省档案館、四川師範大学等に於いて、中国社会主義運動に関する資料調査、紅軍強渡大渡河遺址、和平村日虜記念館等に於いて中国革命史旧跡の調査を行い、二〇〇七年三月十日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、科学技術振興調整費により、二〇〇七年三月十二日大阪発、中央研究院に於いて、華僑について資料調査及び研究会へ参加し、二〇〇七年三月十六日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、二〇〇七年三月十日大阪発、ムンバイ市内に於いて、キリスト教文化・都市文化・ヒンドゥー文化についての調査を行い、二〇〇七年三月二十一日帰国。

。冨谷至教授（東方学研究部）は、二〇〇七年三月十五日大阪発、デンマーク国立博物館、ミュンスター大学、ライデン大学に於いて、東アジア考古文物の調査、二国間共同研究に関する研究打合せ、科研費Sの二〇〇七年度の研究に関する打合せを行い、二〇〇七年三月二十六日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（東方学研究部）は、二〇〇七年二月二十六日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて、唐代研究ナレッジベースのための研究打合せと資料収集を行い、二〇〇七年三月二十八日帰国。

外国人研究員

。EMMERICH, Reinhard　ミュンスター大学
唐代の判の研究
（文化生成研究各員部門）
受入教員　冨谷教授
期間　九月一日～
二〇〇七年二月二十八日

。SAKAI, Cécile　パリ第七大学教授
日本近代小説に見る虚構性構築の手法
（文化連関研究客員部門）
受入教員　大浦教授
期間　九月二十五日～
二〇〇七年一月二十五日
。外村　中　ヴュルツブルグ大学講師
東アジアの古代園林
（文化連関研究客員部門）
受入教員　田中淡教授
期間　二〇〇七年二月十九日～
六月三十日
。池上英子　ニュースクール大学大学院
教授
封建国家から近代へ―徳川日本・清代
中国・オスマントルコ
（文化生成研究客員部門）
受入教員　高木助教授
期間　二〇〇七年三月一日～
八月十五日

招聘外国人学者

。WANG, Ding　ベルリン・ブランデ
ンブルク科学院非常勤研究員
中央アジア版刻史の研究
受入教員　高田教授
期間　二〇〇五年十一月三日～
二〇〇七年十一月二日（継続）
。GUMBRECHT, Cordula　ドイツ国
立図書館東アジア部主任
吐魯番探検隊の研究・ドイツ隊と大谷
隊
受入教員　高田教授
期間　二〇〇五年十一月三日～
二〇〇七年十一月二日（継続）
。ESPOSITO, Monica
道蔵輯の研究
受入教員　麥谷教授
期間　四月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。阿　風　中国社会科学院歴史研究所
副研究員
中国明清時代における法律・裁判文書
の研究
受入教員　岩井教授
期間　四月五日～七月三日
。池上英子　ニュースクール大学大学院
教授
祇園祭の歴史社会学的研究
受入教員　高木助教授
期間　五月二十六日～八月十三日
。陳　熙遠　中央研究院歴史語言研究所
助理研究員
清代法制史、近代思想史
受入教員　森教授
期間　五月二十八日～六月二十七日
。于　志嘉　中央研究院歴史語言研究所
研究員
明代社会史および軍事史の研究
受入教員　岩井教授
期間　五月二十八日～六月二十七日
。王　國良　台北大学古典文献学研究所
所長
東アジア漢文小説研究
受入教員　金教授
期間　六月十八日～七月五日
。張　啓雄　中央研究院・近代史研究所
「政教分離」と「政経一体」戦後　日
本対台湾外交政策の形成と転換
受入教員　籠谷教授
期間　六月二十六日～八月十日
。黄　克武　中央研究院近代史研究所研
究員
日本的陽明学興中国近代化
受入教員　森教授

期間　六月二十七日～九月二十二日
。成　素梅　山西大学科学技術哲学研究
センター教授
日本における物理学の受容とその科学
哲学的考察
受入教員　武田教授
期間　六月二十八日
～十一月二十五日
。SMITH Henry　コロンビア大学東ア
ジア学科教授
日本近代建築史論、講談および浪曲に
おける赤穂浪士
受入教員　高木助教授
期間　七月一日～
二〇〇七年六月三十日
。黄　蘭翔　中央研究院台湾史研究所副
研究員
関中創立戒壇図経にみえる唐代の仏教
伽藍
受入教員　田中淡教授
期間　七月十四日～九月十三日
。陳　金華　ブリティッシュコロンビア
大学準教授
中国八世紀初期の国家と宗教
受入教員　船山助教授
期間　七月二十五日～八月十九日
。崔　鳳春　広西師範大学社会文化興旅
遊学院教授
日中戦争期中国における朝鮮人の抗日
運動と日本人の反戦運動
受入教員　水野教授
期間　八月二一日～十一月十五日
。LEDDEROSE, Lothar　ハイデルベ
ルク大学美術史研究所所長
房山雲居寺を中心とする中国仏教石刻
資料と仏教儀礼空間
受入教員　田中淡教授
期間　九月二十五日～
二〇〇七年三月二十四日
。池上英子　ニュースクール大学大学院
教授
祇園祭の歴史社会学的研究
受入教員　高木教授
期間　九月二十五日～
二〇〇七年二月二十八日
。阿　風　中国社会科学院歴史研究所
副研究員
中国明清時代における法律・裁判文書
の研究
受入教員　岩井教授
期間　九月二十七日～十月二十六日
。VOGELSANG, Kai　ミュンヘン大
学ハイゼンベルグ特別研究員
Studies in the textual and literary
criticism of the Tso-chuan（c. 4th
c. BC）
受入教員　ウィッテルン助教授
期間　十月一日～
二〇〇七年九月三十日
。高　啓安　蘭州商学院教授
シルクロード飲食文化の研究
受入教員　高田教授
期間　十月五日～
二〇〇七年十月四日
。LAPTEV, Sergey　実践東洋学学院
社会政治学部助教授
汎アジア科学技術起源論
受入教員　武田教授
期間　十月二十六日～
二〇〇七年十月二十五日
。鞏　文　中国社会科学院考古研究所
副研究員
三～六世紀の装身具からみた東アジア
の文化交流
受入教員　岡村教授

期間　十二月六日～
二〇〇七年三月五日
。呉　小安　北京大学副教授
東南アジアにおける華僑ネットワークと国家形成
受入教員　籠谷教授
期間　二〇〇七年一月二日～
二〇〇七年三月一日
。金　秉駿　翰林大学教授
張家山漢簡「二年律令」の研究
受入教員　冨谷教授
期間　二〇〇七年一月十日～
二〇〇七年二月一日
。徐　世虹　中国政法大学法律古籍整理研究所長
中国法制史に関する資料収集と研究開始出席
受入教員　冨谷教授
期間　二〇〇七年一月十二日～
二〇〇七年二月二日
。黄　薀知　香港中文大学助教授
中国文化における基本的心理概念の系譜
受入教員　高田教授
期間　二〇〇七年三月十日～
二〇〇七年三月三十一日
。王　才強　国立シンガポール大学教授
唐・宋時代における中国および日本の都市
受入教員　田中淡教授
期間　二〇〇七年三月十二日～
二〇〇七年四月二十日

外国人共同研究者

。ESPESSET, Gregoire　中央研究院歴史語言研究所研究員
道教史における『太平経』の再評価
受入教員　麥谷教授
期間　四月一日～
二〇〇八年三月三十一日
。韓　燕麗
海外華人による文学・映画作品に関する研究
受入教員　金教授
期間　四月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。SANFT, Charles Theodore　ミュンスター大学漢字・東アジア学研究所講師
中国前漢時代の礼と法をめぐる学術思想
受入教員　冨谷教授
期間　四月十日～
二〇〇七年四月九日
。金　麗實
植民地期在満朝鮮人の生活・文化・ナショナルアイデンティティー
受入教員　水野教授
期間　四月十五日～
二〇〇八年四月十四日
。關　瑾華
中國戯曲、俗文學、特別是廣東的説唱
受入教員　金教授
期間　七月十日～
二〇〇七年六月三十日
。LIM Sung yun
植民地期朝鮮の家族制度と法制度に関する研究
受入教員　水野教授
期間　九月十五日～
二〇〇七年七月三十日
。DE GANON, Pieter Sebastian
近世・近代日本における「肉食」の文化的意味、歴史、社会関係
受入教員　高木助教授

期間　九月二十日～
二〇〇七年八月三十一日
。SCHERRMANN, Sylke Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査
受入教員　岩井教授
期間　十月一日～
二〇〇七年三月三十一日

外国人研究生

。SOLOMON, Deborah
一九二九年光州学生運動の研究
受入教員　水野教授
期間　二〇〇五年七月一日～
二〇〇七年六月三十日（継続）
。朴　眞煥
韓国における良心的兵役拒否を通してみる韓国社会の徴兵制についてのディスコース研究
受入教員　田中雅一教授
期間　四月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。SHASHNINA, Olga Vladimirovna
現代日本社会における宗教の役割
受入教員　田中雅一教授
期間　四月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。SHENDEROVICH, Esther
国際関係における明治期日本の自己表現
受入教員　高木助教授
期間　四月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。常　雪鷹
日中古典文学の比較研究
受入教員　金教授
期間　十月一日～
二〇〇七年九月三十日
。KEET, Philomena
衣類と遊ぶ—日本の若者ファッション現象であるコスプレに見る周縁性、創造力、アイデンティティ
受入教員　田中雅一教授
期間　十月一日～
二〇〇七年三月三十一日
。翟　魯寧
中国貴州省安順屯堡地域における「地劇」とそこに生活している女性達の関わり
受入教員　田中雅一教授
期間　十月一日～
二〇〇七年三月三十一日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇六年度漢籍担当職員講習会（初級）
第一日（十月二日）
オリエンテーション　森　時彦
漢籍について　冨谷　至
カードの取り方—漢籍整理の実践　永田知之
第二日（十月三日）
工具書について　高井たかね
漢字目録カード作成実習
第三日（十月四日）
目録検索とデータベースの検索　安岡孝一
漢籍データ入力実習（一）
第四日（十月五日）
和刻本について　梶浦　晋
漢籍データ入力実習（二）
第五日（十月六日）
朝鮮本について　矢木　毅
実習解説　梶浦　晋
情報交換・質疑応答　冨谷　至

。二〇〇六年度漢籍担当職員講習会（中級）
第一日（十一月六日）
オリエンテーション　森　時彦
経部について　古勝隆一
叢書部について　山崎　岳
叢書と漢籍データベース　安岡孝一
第二日（十一月七日）
史部について　宮宅　潔
漢籍データ入力実習（一）
第三日（十一月八日）
子部について　武田時昌
漢籍データ入力実習（二）
第四日（十一月九日）
集部について　井波陵一
漢籍データ入力実習（三）
第五日（十一月十日）
現代中国書について
横浜国立大学大学院国際社会科学研究科助教授　村上　衛
実習解説　梶浦　晋
情報交換・質疑応答　冨谷　至

お客さま

四月五日　寧夏大学歴史学系教授　杜建録他一名（岩井、古松が対応した）
五月二十三日　Associate Professor, Sinologisch Instituut, Faculteit der Letteren, Universiteit Leiden HARIET T. Zurndorfer 他一名（金、小野、籠谷、岩井、山崎、小野、阿風が対応した）
六月七日　中国社会科学院社会科学文献出版社社長　謝　寿光他三名（狭間、森、岩井が対応した）
六月二六日　華中師範大学教授　章　開沅他一名（森、岩井が対応した）
九月二十日　韓国外国語大学校教授　朴星來、韓国科学技術翰林院韓国科学技術史編纂委員長　宋　相庸他十三名（金、武田が対応した）
九月二十六日　中国孫中山研究会秘書長王　玉璞（岩井、森が対応した）
十月九日　パリ国際哲学コレージュ所長ブリュノ・クレマン（大浦、王寺が対応した）
十月十七日　中国社会科学院経済研究所教授　劉　蘭兮他三名（森、岩井、石川が対応した）
十二月八日　中国東北師範大学歴史文化学院教授　曲　暁範他一名（森、石川が対応した）
十二月十二日　ソウル大学校統一研究所長　朴　明圭（水野、古市が対応した）

続「カーブル」と「カブール」

稲葉　穣

田中雅一教授を班長として、本年度よりスタートした共同研究班「複数文化接触領域の人文学」では、参加者による研究発表とテキスト会読を並行して行っている。研究発表の方は複数文化が接触する領域＝コンタクト・ゾーンに関連する様々なテーマにかかわる報告と討論がなされ、私のように普段は文献にかじりついている人間にとっては大変刺激的な研究機会となっている。

一方テキスト会読の方は、異文化の中を旅した人々の記録から、文化認識や文化接触の様相を読み取るべく、旅行記を題材としたい、という班長の意向のもと、とりあえず一九世紀前半のイギリス人外交使節アレクサンダー・バーンズによるカーブルへの旅行（一八三六―三八年）の記録を読み進めている。このバーンズの旅行記はその名も*Cabool*というタイトルである。もちろんカーブルのことなのだが、我が国においてこの都市の名前が一般に「カブール」と写され、それがどこに由来するのかという点について、数年前にこの所報に短い文を書いたことがある（所報人文第四九号）。そこでは江戸末期の文献に「加布利」と書いて「カブユル」と、また「喀布爾」と書いて「カビユル」というルビが振られている、というところを確認するまでで力尽きたのだが、その後少々新しい知見を得た。近藤治先生の『東洋人のインド観』（汲古書院、二〇〇六年）を通じ、すでに一九世紀初頭、山村才助の『印度志』中に「加補児」に「カブユル」というルビが、また「加補爾」に「カビユル」というルビが振られていることを知ったのである。近藤先生によれば、山村の『印度志』は、ヨハン・ヒューブナーのドイツ語地理書のオランダ語訳『ゼオガラヒー』のうち、インドに関する部分の翻訳紹介であるが、そこには「加補爾（カビユル）、一名カホウル（Caboul）といふ。」とある（『東洋人のインド観』一二一頁）。残念ながら私にはオランダ語の知識がないので、当時オランダ人が「Caboul」をどう発音したのか正確にはわからないが、現在のオランダ語であれば「カバウル」といった感じだろうか。ただし外来語としてなら「カブール」と読まれた可能性はあろう。『ゼオガラヒー』の原書はドイツ語であるわけだが、ドイツ語で外国の地名を「Caboul」と音写することは想像しにくいから、やは

りフランス語系の音写が引き写されたものなのかも知れない。そもそもイギリス人たるバーンズが、英語らしからぬ「Cabool」という表記を用いてることからも、ヨーロッパにおいて当時何か定番の表記があった可能性もある。

いずれにせよ、どうもオランダ語の段階ですでに「カブール」という発音が成立していて、それが日本でも取り入れられた可能性が出てきた、というところで再び紙数が尽きた。ヨーロッパ諸語においてもともと「カーブル」がどう写されたのか、および日本語の「カブユル／カビユル」というルビはどこに由来するのか、といった疑問はまだ残っている。何かわかったらまた折を見て書いてみたい。

近代古都研究雑感

高木博志

京都の枝垂れ桜は、京都にあるだけで雅である。

二〇〇三～五年度までの「近代京都研究」班（研究代表、丸山宏名城大学教授）をひきつぎ、「近代古都研究」班を二〇〇六年度よりはじめた。丸山班は、最後の国内客員の研究班であった。客員研究班という制度は、人文研の共同研究会を外部に開く意味でも、意義深かったので、なくなったのは惜しい。

「近代京都研究」班では、歴史学・造園史・建築史・美術史・歴史地理学など学際的に研究がおこなわれ、とくに京都が「古都」であると「歴史」や「伝統」のなかで表象された像と、政治的・経済的な都市の現実との異同が問題となった（伊従勉編『近代京都研究―みやこから一地方都市への軌跡』二〇〇一年）。その意図は、二〇〇五年度の人文研夏期公開講座を、「古都イメージの近代と現実」という統一テーマで、「近代京都研究」班が担当したことからも明らかである。

新しく「近代古都」という研究課題を学際的に取り組む際に念頭においたことは、「古都」の語の意味である。「古都」という語が一般化し、京都や奈良がそれを自己表象するようになるのは、一九六〇年代の高度経済成長期以降のことである。「古都」とは、天皇がいなくなった旧都（もとのみやこ）であると考える。たとえば「みやこ」という語は本来、「帝王ノ住マセ

ラルル地ノ称」（大槻文彦『言海』一八八九年）であったのが、現行の『広辞苑』では首都や都会の意味も加わり、近現代を通じて語義が拡大している。これは一九六六年に制定された古都保存法が対象とする「古都」が、既定の京都市・奈良市・鎌倉市・斑鳩町・明日香村・大津市などから地方城下町までをその射程に入れつつあることも、こうした語義の拡大に照応するだろう。

しかも「近代京都研究」班で高久嶺之介氏が論じたように、一貫して京都府や京都市は、近代を通じて工業都市を目指していたのだ。したがってある意味で、かつての「歴史」や「伝統」に頼り文化財化した「古都」を売り物とする施策は新しいものといえる。たとえば京都市は昭和初期に七十万人を超える大都市であった一方で、奈良は同時期に県全体でも十一万人余の人口にすぎなかった。大都市の京都と田舎の奈良という異質なものが同じ「古都」という概念でくくられるようになったのは、昭和期になって大衆社会状況や観光の隆盛などを通じてであろう。

もう一つ思っているのは、古都研究に取り組む際に、牧歌的な「古都」礼賛はやめたいということである。平安遷都千二百年記念や昨今はやりの京都検定などで賞揚される、雅、国風、貴族性、町衆、幕末の志士など歴史貫通的な京都イメージは、近代に構築されてきた表象であり、相対化することが学問的に必要であると思う。日本文化と奈良・京都の地域文化とをストレートに結びつける施策・情報が満ちているなかで、たちどまって辛口の共同研究があってもいい。

といいつつ最近の私のためらいは、近代に画一化された神社景観に身をおくとほっとし、文化財保護制度で囲い込まれた国宝・東寺帝釈天像を端正と思い、平安神宮の紅枝垂れ桜を見にゆく自分についてである。近代の文化は前近代の上に重層し変化するものであるが、近代の政治や学知を媒介に、新たに創り出された来歴はしっかりと見極める必要があるだろう。そうしてできあがった文化を楽しみ愛でる自分がいてもまったく問題ないのではないか。そして一方、地域の文化は、別にナショナリズムと結びつく必要もないだろう。

ケンジントン公園の森と栗鼠

辻　正博

平成十九年度から始まった「西陲發現中國中世寫本研究」班に参加させていただいている。研究の対象となるのは、中央アジアから中国西北辺境におよぶ地域から出土した古文書である。内容は、仏教をはじめとする経典の写本から私信・帳簿の類に至るまで多岐にわたる。班員おのおのが自らの問題関心にしたがって関係文書を取り上げ、研究発表を行っている。研究班を始めるに当たって、高田時雄班長から「年次報告」を刊行する旨が宣言されたが、お陰様で十九年度は十名の班員の執筆にかかる報告書を『敦煌写本研究年報』として世に問うことができた。

研究班の末席に名を連ねるわたくしは、中国法制史を勉強する身であり、「敦煌学」や「トルファン学」の専家ではない。ただ、「敦煌文書」の発見以来、一貫して研究拠点の一つであり続けた京都で東洋史を学んだ関わりから耳学問として敦煌文献に関心をもち、大学に残って中国史研究を続けてゆく中で、折々に文書を読む機会をもつことができた。研究などと呼べた代物ではないが、それらを扱った小文を草したこともある。このたびの研究班参加は、正面から敦煌・吐魯番文書に取り組む機会を与えていただいたものと感謝している。

今頃になって「敦煌文書」かと訝られる向きがあるかも知れないが、西域出土文献研究をめぐる環境は目下大きな変化のただ中にある。一昔前までは解像度の低いマイクロフィルムを見るのが普通であり、鮮明な写真のある文書はごく一部に過ぎなかったけれども、今ではＩＤＰ（国際敦煌学プロジェクト）のデータベース等で高解像度のデジタル画像を容易に入手することができるし、主要研究機関が所蔵する文書であれば、中国で出版された図録で写真（大半がモノクロ）を見ることができる。

その代償という訳でもあるまいが、以前は比較的容易であった文書原本へのアクセスは制限されつつあると聞く。ちょうど十年前、一年間にわたって英国およびフランスでの在外研究を許された折りには、大英図書館・フランス国立図書館のご厚意により、こちらが閲覧を希望するほとんどすべての文書について原本調査を行うことができた。一日あたりの閲覧制限は一応設けられていたものの、個々の原本について普通に観

察している限りその制限を超えて閲覧する時間的な余裕など無かった。ロンドンもパリも、他に見に行きたい場所は無数にあったけれども、あの「宝の山」に勝るところはあるまいと思っている。

夕刻に大英図書館（当時はテムズ川の南岸、ブラックフライヤーズにあった）を後にして下宿に帰る途中、特に日の長い時期にはケンジントン公園に立ち寄ることもあったが、そこには大都会の真ん中とは思えぬほどの広大な芝生と森が拡がっていた。時に栗鼠の姿を見かけることがあり、木の実を前足にもって佇む姿に心が和んだものである。聞けば、栗鼠は団栗を森のそこここに埋めておき、後で取り出して食べるのだとか。取り出し忘れた実は、春に芽を出して若木となるそうである。研究班参加を契機に欧州で集めた調査資料が一つでも多く芽を出してくれればと思う。

アメリカ大学新事情
――ハーバードとMIT

竹沢泰子

京都の姉妹都市、ボストン。そのボストンの隣にチャールズ川を挟んで位置するのがケンブリッジである。ここにハーバードとMIT（マサチューセッツ工科大学）がある。二つの大学で得た経験から、ここでは授業スタイルについて紹介したい。

MITはキャンパス全体が、ハーバードも大半の図書館や教室が、ワイヤレスで、内部関係者用の認証システムをクリアすれば、自分のパソコンからインターネットを自由に使うことができる。これが最も効力を発揮する場は、授業である。例えば私が聴講していた「帝国と科学」では、若い教員が毎回関連するサイトを用いて、ビジュアル・イメージを講義に取り込んでいた。ジェームズ・クックの船や現地の様子、世界地図の歴史的変遷、優生学の研究対象とされた人々の写真、今日のエイズ感染地域などなど。毎回全部自分で準備するとなると相当な労力と時間を要するが、信頼できるサイト（例えば各国の国会図書館や大学など）を用いれば、授業で重宝することになる。ただし、MITの元同僚の話では、授業中に学生が、インターネットを利用してこちらの講義内容が正しいかどうかをチェックし、文句を言う場合もあるらしい。

両大学とも大抵、個々の授業には専用サイトが設けられる。教師は、所定のフォーマットにしたがって入力し、どの範囲の人々にアクセスを許可するか（受講者のみ、キャンパス内、制限無しなど）自分で決められる。このサイトに、授業概要やシラバスから始まり、関連リンク、リーディングスや宿題などをアップすることができる。ディスカッションは、全員参加型であり、関連ニュースなどの情報交換、意見交換ができる場となっている。毎週の課題論文は、学生がそのサイトからPDFファイル形式でダウンロードする仕組みである。論文の著作権も、出典を入力してチェックマークを入れると、自動的にクリアできる。

ちなみに、現在アメリカ合衆国において、論文集（テキスト等を除いて）の売れ行きが壊滅的である一因は、上記のような教育システムの転換にあるようだ。必要箇所だけPDFファイルにして廻されると出版社が嘆いていた。

MITでは、学生たちに恵まれたこともあり、私自身授業経験から大いに啓発された。今年の京大文学研究科社会学での講義は、試験的にMITと同様、一回三時間とし、一時間講義、一時間演習、一時間ディスカッションを予定している。MITで英語による講義が務まるか案じていたが、終わってみると、MITで授業をするより、京大で授業を行う方が難しいと思った。学生をディスカッションに導く苦労、緊張感をもって講義ノートとハンドアウトを作成し授業に臨むといった自分自身の姿勢―。

いずれにせよ、七年に一度くらいの（半強制的）サバティカルは、われわれの研究・教育活動をリフレッシュさせる上では、不可欠だと思う。

今週の授業で使用するサイトのひとつは、以下のアメリカ哲学協会所蔵の優生学関係のデジタル・アーカイブである。学生の反応は果たしてどのようなものだろうか。

http://www.amphilsoc.org/library/mole/a/aes.htm#boxfolder2

感謝、叢書集成

古勝隆一

大学入学以来、漢籍のたくさんあるところで学んできたので、資料不足の苦しさというものを切実に味わったことはなかった。たいていの文献は図書館にあった。むろん、そんな幸福がいつまでも続くと固く信じていたわけでもなかったが、万事、恵まれた人間はそのように呑気なものであろう。

研究所の助手勤務の五・六年目には、転出先を求めてかなり苦しんだが、その時、千葉大学が与えてくれた採用の知らせは、嬉しいものであった。新しい地で、生まれ変わったつもりで努力しようと決意し、そして私は確かにある程度、生まれ変われたのかも知れない。助手のころ、かなり行き詰まっていた論文書きにしても、授業や雑務の傍ら、いつの間にか軌道に復帰したらしい。

ただ千葉大学に漢籍が少ないことは赴任前から予想できたものの、やはりそれは未経験のことに属した。自分の研究はさておいても、図書館の漢籍の乏しさゆえ、授業に差し支えが出るのには困惑した。著作権問

題のない、和刻本の『四書集注』を講読のテキストにしようとしても、そんなものは影印本すらなかった。しかしそこで「こんな書物のない大学では勉強できるはずがない」と言い放つような教師にだけはなりたくなかった。私にとっての希望の地において、そのような絶望的な考え方は似つかわしくないように思われた。

そのような中で、私を救ってくれたのが京都から持っていった新文豊版の「叢書集成」であった。一九三〇年代、古文献の集成を目指して作られた巨大な叢書の叢書ともいうべき書物である。実は、百二十冊に及ぶこの巨冊は私のものではなく、助手時代の先輩、稲本泰生さんが転出された際に借り受けたものである。研究所にいる限りあまり用途はなく、まさに高閣に束ねるよりなかった。他により読みやすく、よりよく整理された本があったからである。

しかし千葉の地において、「叢書集成」はありがたい本であった。たいていの書物がここにあるという安心感は何ものにも代えがたかった。自室に信頼できる小図書館があるようなものである。底本が悪いとか、排印が誤っているとか、字が小さいとか、細かいことはいっていられない。講読中、難所に当たった際、「叢書集成」を開いてみせて学生の疑義を解くことができたのは、私にとっては喜ばしい体験であった。電子的なデータベースから「検索結果」を示したところで、晴れやかな納得の表情をみることはできない。

さて人文研に戻り幾ばくかの時が過ぎた今、「叢書集成」はいまだに梱包されたままである。もとの持ち主にお返しすべきなのか、あるいは代価を払って買い取り、吉田キャンパス内に移転した後、ふたたび活躍の機会を与えるべきなのであろうか。思案のしどころである。

柔らかな背中の街

久保昭博

サラ・コフマンの『オルドネル通り、ラバ通り』（庄田常勝訳、未知谷、一九九五年）を読んだのは、パリでの留学を終え、京都に移り住んでからである。実はこの二つの通りがあるパリ北東部の、アラブ系、アフリカ系移民が多く居留するうらぶれた界隈は、私が四年間を過ごした場所である。オルドネル通りは18区の両端をつなぐほど東西に長く延びた通りである。

この道の東側は、少し前までは（今でもある程度は）麻薬と犯罪のはびこる区域として知られたグット・ドール界隈の北限となっている（少なくとも私の地理感覚ではそうだ）。そしてそのオルドネル通りのひと筋南にこれと並行するマルカデ通り—ここに私は一時期住んでいた—と、これら二つの通りと直角に交わって北のペリフェリック（環状道路）に通ずるポワッソニエ通りの交差点から、モンマルトルの丘に向けて南西に細い坂道となっているのがラバ通りであり、その東側は現在スリランカ人街となっている。このようにわざわざ訪れる人もないであろうがゆえに、一層自分の生活に密着していた場所の名が、ニーチェやフロイトを論ずる哲学者の著作に付けられているのを見て、最初は不思議な感じがしたものだ。だがコフマンにとってここは、彼女の運命を決定づけた場所であったのだ。『オルドネル通り、ラバ通り』は、ナチスドイツ占領下にあるパリのまさにこの場所で、ユダヤ人として少女時代を過ごした哲学者の自伝である。彼女はそこでラビの父親が警察に連行されるのを目の当たりにし、その後一斉摘発を逃れた母と自分をかくまってくれた「メメ（おばちゃん）」と呼ばれる女性の家で、もうひとつの「戦争」に巻き込まれた。サラを我が娘のように可愛がるメメと実母は、少女の取り合いを演じ、彼女はふたりの「母」の間で、またその各々が体現しているユダヤとフランス（カトリックというよりは共和主義のフランス）の間で板挟みになって、戦中戦後を生きたのだ。この二つの「戦争」を物静かに語るコフマンの自伝は、この町についての私の記憶と印象の中に、古傷のようなものを残した。

さて二つの通りは、それぞれ自宅（オルドネル通り）と、メメの家（ラバ通り）の所在地である。それゆえこの自伝の表題を、ふたりの「母」の比喩ととることは容易であろう。さらに幾人かの批評家は、オルドネル（Ordener）の中に「秩序（ordre）」を、またラバ（Labat）の中には「彼方（là-bas）」を見いだしているようだ。ユダヤ的秩序から彼方に望む共和国フランスという解釈は少々あざとい気もするが、精神分析批評に通暁している著者のこと、そのような読解を誘発することを仕組んだのかもしれない。この解釈の是非はさておき、名によって場の印象が形成されるということはある。『オルドネル通り、ラバ通り』にも著者が通っていた小学校のある通りとして登場するドゥドーヴィル通り（Rue Doudeauville）に前述のマルカデ通りから私が越した折、友人が「水はどこから来る？の街」（d'où d'eau ville）と言ったのに対し、私は、いや、「柔らかな背中の街」（doux dos ville）

だよ、と答えたのだが、戯れに口を突いて出たこの表現は、その後奇妙にも脳裏を離れず、街のイマージュと結びついてしまった。今ではこの界隈のことを思い出すたびに、緑や黄色の色鮮やかな布で黒い赤ん坊をくくりつけた、恰幅の良いアフリカ系女性の柔らかそうな背中が目に浮かぶ。

それぞれの浄土

齋藤智寛

はじめての台湾ゆきで楽しみにし、じじつ楽しかったことの一つに、仏教団体の道場見学があった。現代中国の仏教は激動の近現代史とともに今なお形成途上にあって、唐宋の禅宗を題材にその宗派意識の形成を追ってきたわたしにとっては、それが大きな魅力なのである。

浄土宗文教基金会という団体の特徴はいくつか数えうるが、わたしに最も強い印象を残したのはやはりその教義が発展途上にあることであった。かれらはもと「現代禅」と名のる禅定修行の団体だったが、開祖の李元松師が逝去する直前に教団ごと浄土宗に宗旨がえしたという特異な経歴を持っているのである。

年譜によれば、二〇〇三年初め病に倒れた李師は信徒に念仏の専修を指示、「現代禅」を「弥陀共修会」に改めると、年内に四十六歳の若さで世を去った―信徒の言い方を借りれば「往生」した―。かくて師のおもいがけない早世後に取り残された信徒たちは、それぞれのやり方でその教えに向き合い修道を続けることとなった。経典の読書会を開いて知解の研鑽にはげむ人々もいれば、ひたすら念仏の行に身をゆだねる人々もいる、という具合に。

中でも、急激な教義の変化を信徒らがどう受け止めたのか、これがわたしには不思議であった。禅を補完するものとして念仏を並修するのは中国仏教に普遍的な傾向であるし、「心こそが浄土（唯心浄土）」との口号もまた禅と相性がよい。しかしかれらの場合は禅浄双修ではなく完全なる回心であったし、信徒の一人によればかれらは唯心浄土ではなく法然流の他力念仏を正宗としている。こうした根本的な変化を支える理論を、李師は示さないままに世を去ってしまったらしい。こちらの質問に対する信徒の方々の答にはしばしば「自分の理解では」との前置きがされたし、わたしそ

っちのけで議論や異議申し立てがおこなわれる場面もあったのである。

師の最後の示教をみずから拒み、その円寂後にはじめて大悟したある唐代の禅師は、自分が感謝しているのはじつに師がそれを説き明かさなかったことだと述懐している。李師がその信奉者たちに晩年定論を示せなかったのは、もとより信徒の望んだことではない。けれどかれらは、師をうしなったがゆえに師と出会い続けるのだろうし、それがすなわち自己との出会いでもあり続けるのだろう。かれらの浄土がそのような場所であることを、わたしは心から願っている。

〈人文科学協会奨励賞受賞者〉

本を並べる

片山杜秀

深夜の暗闇の向こうで、シャリッとかサラッとか、軽いものの滑る小さな音がする。しまったと思ったときはもう遅い。たちまち続いてドタンバタンと大崩壊が起きる。ほんの数秒で瓦礫の山だ。

といっても、崖崩れや土石流ではない。本のなだれなのだ。

数年前、荷物の多さを理由に前の居所を追われ、今の家に越した。一階は元は建設会社の作業場である。中規模のスーパーマーケットでも開ける程度の広さがある。だが、あまりにがらんどうで、天井も高すぎる。その空間に、それまで使っていた書架が似合わない。やむをえず、蔵書のほとんどはダンボールに入れたまま積みっぱなしになった。

どうしてもあの本が必要というときは、何百箱かのダンボールをこじあけて探す。そうしてばらした本を適当に積む。新しく増えた本も積む。何年かそんなことを繰り返したら、身長よりも高い、甚だしく不安定な山なみが出来た。テレビのワイドショーでよく取り上げられる「ゴミ屋敷」を笑えない。

これはもう限界だ。仕事を二の次にし、本を並べることにした。折々に買い足してきた棚を総動員し、壁に打ち付けたり、転倒防止バーを渡したりする。棚の総延長は約四百メートルになった。雑誌や文庫やプログラム類、それから楽譜とかの分はとてもないが、いわゆる単行本だけなら収まりそうな計算だ。

そんなにたくさん本を溜め込んでも、どうせ読みき

れないのだから、いい加減にしろと、周囲から言われ続けてきた。私も以前はよくそう思った。しかし、あるとき考えが変わった。ずっと読みたいと願いながら果たせないつもりでいた本を、ようやく嬉々として読んだ。そして結末にそれなりの感慨を持ち、最後のページに至ったら、紛れもない自分の筆跡で何年か前に読み了えた日付がペン書きされていた。しばし呆然とした。

そういえば、読んでいないのに読んだつもりになって、なぜかその内容を他人に説明できてしまう本もある。そうかと思えば、読んでもそれを忘れ、知らないつもりの本もある。

ということは、読んだ読まないなんて、もうどうでもいいのではないか。知らないものを類推してついには知っているつもりにさえなる傲慢な作用が一方にあり、知ったことを忘却してしまう哀愁漂う作用がもう一方にある。そして、この傲慢と哀愁の狭間にはまるためには、記憶しきれない物量が必要である。何の因果か、私は今のところこの狭間から抜け出したいと思えない。道から外れた気もするが、とにかくそこに一種の快楽があるのである。

結局、書架は目論見よりもだいぶん足りなかった。近々、もっと増やそうと思っている。

所のうち・そと

書いたもの一覧

（氏名五十音順　◉は単行本）

浅原達郎
殷代の甲骨による占いと卜辞　東アジア怪異学会編『亀卜』　五月
読上海博物館蔵楚簡札記序　曰古　八号　三月
尾崎雄二郎先生と一般教育　曰古　八号　三月

李昇燁
朝鮮人内鮮一体論者の転向と同化の論理　尹海東他編『近代を読み直す』ソウル：歴史批評社　十一月（原文朝鮮語）

池田巧
◉中国語のしくみ　白水社　三月

石川禎浩
中共一大会場被捜査之謎　百年潮　四期　四月
死後の孫文――遺書と紀念週　東方学報　京都　七九冊　九月
プリンストン高等研究所の東洋学（下）　漢字と情報　一三号　十月
通史と歴史像　飯島渉等編『二一世紀の中国近現代史研究を求めて』研文出版　十一月
『中国共産党成立史』出版後的補充説明　上海革命史資料與研究　六輯　十二月
◉初期コミンテルンと東アジア（共編著）　不二出版　二月

稲葉穣
漢字文献とアフガニスタン古代史　漢字と文化　八号　京都大学人文科学研究所二一世紀COEプログラム　六月
講演録：複数文化接触領域としての古代アフガニスタン　コンタクトゾーン　一号　京都大学人文科学研究所附属人文学国際研究センター　三月

井波陵一
断片であるということ――王国維の『人間詞話』について　東方学報　京都　七九冊　九月
訳語から見えるもの　漢字と文化　九号　十一月

岩井茂樹
一六～一八世紀東アジアにおける国際商業と互市体制　東アジア研究　四六号　十一月
清代の互市と〝沈黙外交〟　夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』　京都大学学術出版会　三月
王朝財政にみる集権と分散　『共同シンポジウム「東アジア文明の歴史的特質」報告集』早稲田大学21世紀COEプロ

グラム　三月

岩城卓二

幕藩体制における西摂津支配　科研費成果報告書『国家的港湾都市域としての西摂津地域形成過程の研究』　二〇〇六年三月

岸和田藩家臣団について　科研費成果報告書『畿内譜代大名岸和田藩の総合的研究』　二〇〇六年三月

◉近世畿内・近国支配の構造　柏書房　六月

図説尼崎の歴史　近世編　尼崎市　二月（山崎隆三他と共同執筆）

天保期、西摂津における米穀流通　兵庫のしおり　九号　二月

二〇〇六年度日本史研究会近世部会日比報告コメント　日本史研究　五三五号　三月

ウィッテルン　クリスティアン

Writing Systems and Character Representation. Lou Burnard et al. (eds.) *Electronic Textual Editing*. Modern Language Association　九月

王寺賢太

晴れた日の朝には自転車で　人文　五四号　六月

書評：マラドーナの栄光と悲惨　マルセロ・ガントマン、アンドレス・ブルゴ編『マラドーナ！』現代企画室　週刊読書人　七月一四日号

◉翻訳：ドニ・ディドロ著『運命論者ジャックとその主人』（田口卓臣との共訳）　白水社　十二月

ケベックの思い出――二〇〇六年度国際18世紀学会若手研究者セミナーに参加して　日本18世紀学会学会ニュース　五三号　十二月

啓蒙のための十章

第一章　二一世紀の問いと一八世紀の回答　京都新聞　一月三〇日

第二章　調和について　京都新聞　二月六日

第三章　歴史について　京都新聞　二月二〇日

第四章　自律について　京都新聞　二月二七日

第五章　弱さについて　京都新聞　三月六日

第六章　齟齬について　京都新聞　三月一三日

第七章　希望について　京都新聞　三月二〇日

第八章　運命について　京都新聞　三月二七日

ジャックの膝、ドニーズの太もも　新潮　三月

大浦康介

〈日本〉を書く――ピエール・ロティ『お菊さん』の位置　宇佐美斉編『日仏交感の近代――文学・美術・音楽』　京都大学学術出版会　五月

ポルノグラフィーにおける言葉と身体――リベルタン小説と猥褻語　吉田城・田口紀子編『身体のフランス文学――ラブレーからプルーストまで』　京都大学学術出版会　十一月

◉翻訳：ウォルター・ケンドリック『シークレット・ミュージアム――猥褻と検閲の近代』（監訳）　平凡社　三月

岡田暁生

ヴィルトゥオーソ狂詩曲！　社交界とオペラとサロンの一九世紀」　伊東信宏編『ピアノはいつピアノになったか』　大阪大学出版局　三月

ドイツ音楽からの脱出？　戦前日本におけるフランス音楽受容の幾つかのモード」　宇佐美斉編『日仏交感の近代』　京都大学出版局　五月

クラシックの黄昏？　大航海　六〇号　十月

練習曲の思想と均質化する指たち　民博通信　一一一号

岡村秀典

座談会：夏王朝探索――現状と展望　歴史と文化（東北学院大学論集）四一号　三月

礼制からみた国家の成立　東アジア古代国家論　すいれん舎　四月

石窟以前の雲岡　日本考古学協会第七二回総会研究発表要旨　五月

対談：異文化理解　天王寺「学びのもり」から――附中・高卒業生対談集　新風書房　十一月

中国古代の農耕儀礼と王権　東洋史研究　六五巻三号　十二月

王朝成立的考古学証拠　二里頭遺址与二里頭文化研究　科学出版社　十二月

西域美術と漢代文物　シルクロードを拓く（シルクロード・奈良国際シンポジウム記録集　八）　一月

私が影響を受けた考古学者　林巳奈夫　文化遺産の世界　二四号　二月

幻の「夏」王朝の発見　資料に見る最新中国史（アジア遊学九六号）　二月

伝沖ノ島出土の透彫り金具について　日中交流の考古学　同成社　三月

北魏方山永固陵の研究――東亜考古学会一九三九年収集品を中心として　東方学報　京都　八〇冊　三月

籠谷直人

日中全面戦争後の在日本華僑・印僑ネットワーク　倉沢愛子ほか編『岩波講座　アジア・太平洋戦争　7　支配と暴力』　岩波書店　五月

十九世紀の東アジアにおける主権国家形成と帝国主義　歴史科学　一八四号　大阪歴史科学協議会　五月

加藤和人

ヒトゲノムマップ（文部科学省科学技術週間にて配布。加納圭他二名と共同制作）　四月

Opinions of Japanese Life Scientists on Science Communication. Proceedings of the 9th International Conference

ence on Public Communication of Science & Technology, Soel, Korea.（東島仁と共著）　五月
わが国におけるこれからのゲノム研究（「ゲノムフォーラム二〇〇五」講演記録　文部科学省科研費特定領域研究「ゲノム」四領域編　九月
ゲノム科学は社会にどのように貢献できるか（「ゲノム科学と社会」シンポジウム記録）　文部科学省科研費特定領域研究「応用ゲノム」編　二〇〇七年三月

菊地　暁

〈民俗学者〉としての藤森照信―その歩く／見る／聞く作法を考える―　10+1　四四号　九月
人文研アカデミー：身体論のすすめ　共通教育通信　七号　十月（他二名と共著）
京大国史の「民俗学時代」　国史研究室通信　三三号　十月
近頃、気になることのいくつか―「民俗」「史学史」「組織」「メディア」「書物」―　artscape：book navigation　十一月
『嗜好』の試行―明治屋PR誌からみる〈洋食〉史―　川村邦光編『日本の知的遺産としての洋食文化の研究』　二月
コスメティック・アグリカルチュラリズム―石川県輪島市「白米の千枚田」の場合―　岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』　吉川弘文館　三月
赤松智城論ノオト―徳応寺所蔵資料を中心に―　人文学報　九四号　三月

金　文京

日中韓三国の三国志―三つの三国志物語　三国志シンポジウム大東文化大　二月
座談会：三国志演義研究をめぐって（共著）　未名　二四号　神戸大学　三月
中国和日本《三国演義》研究的回顧与展望（共著）　文藝研究　文芸研究雑誌社（北京）　四月
東亜争奇文学初探　域外漢籍研究集刊　第二輯　中華書局　五月
東亜細亜争奇文学考察　韓国寓言文学会編『寓言의 人文学的位相과 現代的活用』　図書出版박이정、ソウル　六月
和漢比較文学から東アジア比較文学へ（講演筆録）　文藝論叢　六七号　大谷大学文藝学会　九月
再論《三国演義》版本系統与花関索・関索故事之関係　中国古代小説研究　第二輯　人民文学出版社　十月

久保昭博

翻訳：ミシェル・ヴィノック『知識人の時代』　塚原史他と共訳　紀伊国屋書店　二月

倉島　哲

◉身体技法と社会学的認識　世界思想社　二月

古勝隆一

◉中國中古の學術　研文出版　十一月

書評：澤田多喜男訳註『黄帝四經―馬王堆漢墓帛書　老子乙本巻前古佚書』　週刊読書人　十二月一日号

小関　隆

事典の項目：「労働貴族」「労働者階級」　川北稔編『歴史学事典13：所有と生産』　弘文堂　四月
ランドルフ・チャーチルの死　ヴィクトリア朝文化研究　四号　十一月
◉プリムローズ・リーグの時代：世紀転換期イギリスの保守主義　岩波書店　十二月

齋藤智寛

翻訳：李遠国「天空の文字――道教の符図文献とその分析」京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』　臨川書店　二月

坂本優一郎

事典編集および項目執筆：「株主」　川北稔（責任編集）『歴史学事典　第十三巻　所有と生産』　弘文堂　四月
文献解題：「森谷克己」『アジア的生産様式論』」、「ウィットフォーゲル（平野義太郎・宇佐美誠次郎訳）『支那社会の科学的研究』」、「大塚久雄『共同体の基礎理論』」　山室信一編『岩波講座「帝国」日本の学知　第8巻　空間形成と世界認識』　岩波書店　十月

佐野誠子

怪談考古学・虫ノ巻　中国篇　ダヴィンチ増刊幽 vol.5　メディアファクトリー社　六月
◉中国古典小説選2　捜神記・幽明録・異苑他〈六朝Ⅰ〉　明治書院　十一月
従史官制度来看六朝志怪的歴史　六朝文学国際会議報告論文　北京大学中文系・六朝学術学会　十二月
翻訳：王承文「霊宝「天文」信仰と古霊宝経教義の展開―敦煌本『太上洞玄霊宝真文度人本行妙経を中心に―」　京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』　臨川書店　二月

曾布川　寛

◉科研費成果報告書『中国美術の図像学的研究』（編著）　三月
◉芸術学フォーラム4　東洋の美術（共編著）　勁草書房　七月
漢代画像石の世界　『東洋の美術』　勁草書房　七月
中国石窟の多佛表現―三世佛・七佛・千佛・一万五千佛―　『東洋の美術』　勁草書房　七月
盛唐前夜における中央アジア・ソグド人の活躍　秀明美術　一三号　十一月

高木博志

行政文書にみる明治初期の門跡寺院―『太政類典』『公文録』・京都府庁文書を中心に　科研費成果報告書『随心院

門跡を中心とした京都門跡寺院の社会的機能と歴史的変遷に関する研究』（水本邦彦研究代表者、京都府立大学）　三月
明治維新と賀茂祭　大山喬平監修『上賀茂のもり・やしろ・まつり』　思文閣出版　六月

◉近代天皇制と古都　岩波書店　七月
近代京都と豊臣秀吉　『近代京都の創造』（人文研ブックレット、二三）　同志社大学人文科学研究所　九月
「郷土愛」と「愛国心」はどのように繋がれてきたか　論座　朝日新聞社　二月
戦後六〇年、オーストリアと日本の歴史意識　『ウィーン・シンポジウム　帝国と民族アイデンティティ　東アジアとオーストリアをめぐって』　人間文化研究機構国立歴史民俗博物館　三月

高階絵里加
興味深い英仏絵画の影響「スコットランド美術館展」　日本経済新聞（夕刊）　四月六日
Japan and the West in Meiji Art, *Raku-Yu Kyoto University Newsletter* 9, Spring 2006
須田剋太の「縄文記号」をめぐって　『美術史家、大いに笑う——河野元昭先生のための日本美術史論集』　ブリュッケ　四月
フランスから来た「日本」—『蜻蛉集』挿絵について—　宇佐美斉編『日仏交感の近代』　京大出版会　五月
ブルターニュの「日本」　宇佐美斉編『日仏交感の近代』　京大出版会　五月
「純粋な愛」見せる魔法　「愛の旅人　シャガール展」　日本経済新聞（夕刊）　五月十八日
鮮烈に輝く色彩の共演　「印象派と西洋絵画の巨匠たち展」　日本経済新聞（夕刊）　六月二二日
劇的：華麗、人間洞察も鋭く　「プラド美術館展」　日本経済新聞（夕刊）　七月二七日
自由な表現にかろやかさ　「三つの個展：伊藤存×今村源×須藤悦弘」　日本経済新聞（夕刊）　九月五日
一九世紀絵画の変化示す　「バルビゾンから印象派」展　日本経済新聞（夕刊）　九月十九日
Trans-Acting　五感使い記憶に新しい命—　日本経済新聞（夕刊）　十月二六日
三瀬夏之介展　こわくない大迫力の絵　日本経済新聞（夕刊）　十月二六日
関西発、分野超える力強さ　「ニッポンVS美術」展　日本経済新聞（夕刊）　十一月十五日
心揺さぶる動植物・人間　京都市美術館「春を待つ」　日本経済新聞（夕刊）　一月九日
和洋折衷に豊かさ実感—京都の「揺らぐ近代」展　日本経済新聞（夕刊）　二月十五日
白昼夢の世界へ引き込む　サントリーミュージアム［天保山］ダリ展　日本経済新聞（夕刊）　三月二二日

高田時雄
Семинар "Дуньхуановедение на берегах Невы"（共著）、Письменные Памятники Востока 4　三月

◉『梵諦岡圖書館所藏漢籍目録』、北京、中華書局、伯希和編、高田時雄校訂、補編　六月
共建敦煌學知識庫時需要遵守的幾點建議（共著）　敦煌學知識庫國際學術研討會論文集　六月
『トルファン出土佛典の研究——高昌殘影釋録』と『中村不折舊藏禹域墨書集成』の刊行　敦煌學國際連絡委員會通訊　七月
敦煌學國際聯絡委員會的任務　南京師範大學報二〇〇六年九月八日號　九月
書評：今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』　圖書新聞　十一月
清野謙次蒐集敦煌寫經の行方　漢字と文化　九號　十一月
敦煌遺書與漢語史研究　敦煌研究二〇〇六年第六期（総第一〇〇期）　十二月
A Note on the Lijiang Tibetan Inscription, *Asia Major* XIX, Pt. 1-2.　三月

竹沢泰子
Race Should be Discussed and Understood Across the Globe. *Anthropology News*. American Anthropological Association.　四月
「外国人」としての日系人—「多文化共生」をめざす震災後の神戸のなかで　レーン・ヒラバヤシ他編『日系人とグローバリゼーション』　人文書院　六月
「人種」は存在するか　綾部恒雄・桑山敬巳編『よくわかる文化人類学』　ミネルヴァ書房　十月
現代の人種差別　綾部恒雄・桑山敬巳編『よくわかる文化人類学』　ミネルヴァ書房　十月
フィールドノートから　奥田道大他監修、広田康生他編『先端都市社会学の地平』　ハーベスト社　十一月
兵庫県の多文化共生の取り組み　『KIZUNA』　兵庫県人権啓発協会　三月
解説　神部武宣著『さらばモンゴロイド』　生活書院　三月

武田時昌
婦人病の医学思想　中国思想史研究　二八号　二〇〇六年三月
精誠の哲学　『中国学の十字路』　研文出版　四月
西洋科学の啓蒙家—方以智　橋本高勝編『中国思想の流れ（下）』　晃陽書房　九月
西学受容と近世の科学知識　『第六回日韓科学史セミナー発表予稿集』　九月
人文研アーカイブス（一二三）呂才撰『大唐陰陽書』下巻（巻第三十三）　漢字と情報　一二号　十月
釈円通の中西天文説批判　二〇〇六年度同志社大学ハイテク・リサーチ、学術フロンティア合同シンポジウム講演予稿集（理工学研究所研究報告　四七巻四号別冊）　一月

新蔵新蔵博士の迷信研究―『大唐陰陽書』購入余話　漢字と情報　一四号　二月

田　中　淡

編集後記：佛教藝術　二八六号　五月

インタビュー：中国で構想する建築史　建築雑誌　十二月号

田　中　雅　一

連載：WEBちくま　癒しとイヤラシ　性の文化人類学「1　人類学の3P　その1」（10月）「2　人類学の3P　その2」（11月）「3　女体盛りは芸術？」（12月）「4　性のエスノグラフィー　その1」（1月）「5　性のエスノグラフィー　その2」（2月）「6　性のエスノグラフィー　その3」（3月）「7　性の祭り」（4月）「8　性を展示する　秘宝館　その1」（5月）「9　性を展示する　秘宝館　その2」（6月）「10　自慰とオ～ガズム」（7月）「11　癒しとイヤラシのポルノグラフィー　その1」（8月）「12　癒しとイヤラシのポルノグラフィー　その2」（9月）

FAO Bay of Bengal Programme（1979-2000）における地域概念――その出版物の分析　人文学報　九三号　三月

信仰の証としての暴力――シンガポールのタイ・プーサム祭　宗教研究　七九巻四号

インタビュー：研究室紹介（文化人類学）――現代の性をどう見つめるか　『京都大学新聞』　六月一日

翻訳：イヤル・ベン＝アリ（私の）名前、日本の就学前教育と子どもの力　所報人文　五三号　六月

シンガポールの街角がスペクタクルとなるとき　人環フォーラム　一九号　九月

書評：窪田幸子著『アボリジニ社会のジェンダー人類学』　文化人類学　七一巻二号　九月

書評：小谷汪之『東洋叢書12　罪の文化――インド史の底流』　南アジア研究　一八号　十月

◉共編『ミクロ人類学の実践』　世界思想社　一一月

ミクロ人類学の課題　ミクロ人類学の世界　世界思想社　一一月

網子たちの実践と社会変化――スリランカ地曳網漁の労働組織　ミクロ人類学の世界　世界思想社　一一月

身内で結婚する――スリランカ・タミル漁村における婚姻をめぐって　社会人類学年報　三二巻　一一月

癒しとイヤラシのポルノグラフィー――代々木忠監督作品をめぐって　人文学報　九四号　三月

（翻訳）イヤル・ベン＝アリ　イスラエル軍隊研究に向けての個人的な旅立ち　人文学報　九四号　三月

神々への供物――南インド・チダンバラムにおける寺院儀礼と家庭祭祀をめぐって　人文学報　九五号　三月

コンタクト・ゾーンの文化人類学へ――『帝国のまなざし』を読む　コンタクト・ゾーン　創刊号　三月

言説が数億の女を殺す――内山田氏の書評に応える　文化人類学』七一巻四号　三月

田　中　祐理子

「啓蒙」を求めて　人文　五三号　六月

目と言葉――「レーウェンフック」を考えるために――　人文学報　九三号　十一月（奥付は〇六年三月）

田　辺　明　生

Cultural Politics of Ethics in Everyday Practice: Caste, Local Society and Vernacular Democracy in Orissa, India. 東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文　五月

デモクラシーと生モラル政治―中間集団の現代的可能性に関する一考察　文化人類学　七一巻一号　六月

Recast(e)ing Identity: Transformation of Inter-Caste Relationships in Post-Colonial Rural Orissa. *Modern Asian Studies* 40(3).　七月

ヴァナキュラー・デモクラシーの可能性―ダルマ思想と現代世界　二一世紀フォーラム　No. 106.　三月

谷　川　穣

「透明ランナー」研究ことはじめ　日本教育史往来　一六一号　四月

明治一〇年代における僧侶の学校教員兼務――教育と仏教の近代史にむけての一視角――　仏教史学研究　四九集（一）　八月

文献解題：内田正雄「輿地誌略」、内村鑑三「地理学考」、牧口常三郎「人生地理学」、和辻哲郎「風土」　山室信一編『「帝国」日本の学知　第八巻　空間形成と世界認識』　岩波書店　十月

高橋秀直先生を偲ぶ　以文　四九号　十一月

お伺いしたかったこと　高橋秀直さんを偲ぶ会編『追想　高橋秀直』　二月

田中不二麿をめぐる人々――田中不二麿宛書簡を通して――（鈴木栄樹らと共著）　科研費成果報告書『近代初頭日本における教育の地方分権化・自由化政策の形成』　三月

明治中期における仏教者の俗人教育　人文学報　九四号　二月

富　永　茂　樹

憂鬱という淵源―トクヴィルと近代社会学の発見　みすず　五四一号　八月

二〇〇六年読書アンケート　みすず　五四六号　一月

富　谷　至

近年出土した中国古代の法律　立教大学東アジア地域環境問題研究所『古代文字の中心性と周縁性』　春風社　四月

◉科研費成果報告書『東アジアにおける法と習慣――死刑をめぐる諸問題』　廣西師範大学出版社　四月

◉秦漢刑罰制度研究　朋友書店　十月

◉江陵張家山二四七号墓漢律令の研究

緒言――江陵張家山二四七号墓出土漢律によせて　『江陵張家山二四七号墓漢律令の研究』　朋友書店　十月

生命の剝奪と屍体の処理　『江陵張家山二四七号墓漢律令の研究』　朋友書店　十月
古典再読　池田潔『自由と規律』『中央公論』一月号　十二月
剝奪生命与処理屍体的刑罰　中国政法大学『中国古代法律文献研究』第三輯　一月

中西裕樹

「ショオ文字」の試み　漢字と文化　八号　京都大学人文科学研究所　六月

◉科研費成果報告書『畜語基本資料集』　三月

永田知之

中央研究院歴史語言研究所逗留記　漢字と文化　八号　六月
相関ルールによる唐代官僚遷転の分析（共著）『文化情報学のパースペクティブ』　情報処理学会　十二月
翻訳：王邦維「洛州無影―『南海寄帰内法伝』中の一文に関する新考察―」　京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』　臨川書店　二月
孫国棟著『唐代中央重要文官遷転途径研究』問題点と補訂（共著）　東洋学へのコンピュータ利用　第18回研究セミナー　三月

藤井律之

罪の「加減」と性差　冨谷至編『江陵張家山二四七號墓出土漢律令の研究』　朋友書店　十月

藤原辰史

解題：江澤譲爾『地政学概論』　石川栄耀『国土計画――生活圏の設計』『改訂増補　日本国土計画論』　柳田国男『都市と農村』　R・W・ダレェ『血と土』　山室信一編『「帝国」日本の学知　第八巻　空間形成と世界認識』　岩波書店　十月
稲も亦大和民族なり――水稲品種の「共栄圏」　池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』　人文書院　二月
学に刻まれた満洲の記憶――杉野忠夫の「農業拓殖学」　山本有造編『満洲　記憶と歴史』　京大出版会　三月

船山徹

◉科研費成果報告書『南斉・竟陵文宣王蕭子良撰『浄住子』の訳注作成を中心とする中国六朝仏教史の基礎研究』　二〇〇六年三月
複雑系としての仏教漢文　人文　五三号　六月
従六朝仏典的漢訳与編輯看仏教中国化問題　第二届中日仏学会議論文集（中国人民大学）　十一月
経典の偽作と編輯――『遺教三昧経』と『舎利弗問経』　京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』　臨川書店　二月
Masquerading as Translation: Examples of Chinese Lectures by Indian Scholar-Monks. *Asia Major, Third Series* 19. 1-2

古松崇志

法均と燕京馬鞍山戒壇―契丹（遼）における大乗菩薩戒の流行―　東洋史研究　六五巻三号　一二月
契丹・宋間の澶淵体制における国境　史林　九〇巻一号　一月

水野直樹

近代日朝関係と教科書問題　『研究会誌』五〇号（二〇〇五年度）　滋賀県高等学校社会科教育研究会　五月
戦時期朝鮮の治安維持体制　岩波講座『アジア・太平洋戦争』第七巻（支配と暴力）　五月
対話と交流をとおして共に生きていくために―日本の植民地支配をふりかえる―　『共生の時代』（グリーンコープ連合理事会（福岡））二二四号　八月
創氏改名とは何だったのか　田中宏・板垣竜太編『日韓　始まりのための20章』　岩波書店　一月
初期コミンテルン大会における朝鮮代表の再検討　「初期コミンテルンと東アジア」研究会編著『初期コミンテルンと東アジア』　不二出版　二月
丹波マンガン記念館―戦時下の朝鮮人労働者　『講座・人権ゆかりの地をたずねて（二〇〇五年度講演録）』（世界人権問題研究センター編集・発行）　三月
「同化と差異化―日本の植民地支配と〝創氏改名〟」（朝鮮文）韓国学の世界化事業団・延世大学校国学研究院編『日帝植民地時期を読み直す』　図書出版ヘアン（ソウル）　三月

宮紀子

『農桑輯要』からみた大元ウルスの勧農政策（上）　人文学報九三号　三月
『両足院――学問と外交の軌跡』（共著）　京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室　五月
『農桑輯要』からみた大元ウルスの勧農政策（中）　人文学報九五号　三月

宮宅潔

漢初の二十等爵制―民爵に附帯する特権とその継承―　冨谷至編『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究』　朋友書店　十月
拓本のてざわり　漢字と情報　八号

向井佑介

北魏方山永固陵の研究――東亜考古学会一九三九年収集品を中心として（共著）　東方学報　京都　八〇冊　三月

麥谷邦夫

道教類書と教理體系　京都大學人文科學研究所編『中國宗教文獻研究』　臨川書店　二月

◉唐玄宗金剛般若波羅蜜經注索引

人文科學研究所漢字情報研究センター　三月

◉科研費成果報告書『江南地方志二十五種道教關係記事集成』　三月

◉科研費成果報告書『江南道教の研究』　三月

劉混康略年譜　科研費成果報告書『江南道教の研究』　三月

森　時　彦

一九一〇年代的中国市場与日本棉紡織工業　『〝一九一〇年代的中国〟国際学術研討会論文集』　中国社会科学院近代史研究所　八月

守　岡　知　彦

Concord：プロトタイプ方式のオブジェクト指向データベースの試み　Linux Conference 抄録集　第4巻　日本リヌックス協会　六月

文字オントロジーに基づく文字処理について　情処研報 Vol. 2006, No. 112　十月

◉CHISE Conference 2005 報告書＆Code Fest 京都 2005 資料集（編・共著）　京都大学21世紀ＣＯＥプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」　一月

Character Database 2.0　守岡知彦編『CHISE Conference 2005 報告書＆Code Fest 京都 2005 資料集』　京都大学21世紀ＣＯＥプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」　一月

矢　木　毅

高麗事元期における官品構造の変革　東方学報　京都　七九冊　九月

朝鮮前近代における民族意識の展開――三韓から大韓帝国まで　夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』　京都大学学術出版会　三月

安　岡　孝　一

漢字字体変遷研究のための拓本文字データベース　典籍交流（訓読）と漢字情報要旨集　八月

NかMか　漢字と文化　九号　十一月

Vista で化ける字、化けない字　日経 ITpro　十二月十四日・二十五日

拓本文字データベースの設計と実装　シンポジウム『地域研究と情報学：新たな地平を拓く』　二月

Vista を XP の字体に戻すという jp90 タグの罠　日経 ITpro　二月十三日

朝日字体の終焉　東洋学へのコンピュータ利用第十八回研究セミナー　三月

山　崎　岳

越境草卒――院研究漢喃訪問　漢字と文化　八号　六月

翻訳：劉淑芬「『禅苑清規』にみる茶礼と湯礼」　京都大学人文科学研究所編『中国宗教文献研究』　臨川書店　二月

朝貢と海禁の論理と現実――明代中期の「奸細」宋素卿を題材として　夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』　京都大学学術出版会　三月

山　室　信　一

出版・検閲の態様とその変遷――日本から満洲国へ――　東京大学東洋文化研究所『東洋文化』　八六号　三月

アイデンティティの重層と背反――その彼方に　法政大学国際日本学研究所『東アジア共生モデルの構築と異文化研究』　三月

東アジアにおける日本近代法　早稲田大学比較法研究所編『日本法の国際的文脈――西欧・アジアとの連鎖――』　三月

宮崎滔天「三十三之夢」　京都精華大学文字文明研究所『文字』　終刊号　四月

「満洲領有計画と石原莞爾の世界最終戦争論」「リットン調査団と国際連盟」「満洲国の統治機構」『満洲帝国』　学習研究社　四月

東京裁判六〇年に寄せて――上・下　熊本日日新聞　五月二日・五日

国家とは何か　樋口陽一氏との対談　朝日新聞　六月八日

東アジアはいかに生まれ、どう創られるのか　『東アジアへの視点』（国際東アジア研究センター）　一七巻二号　六月

戦争の記憶と伝承　現代のことば　京都新聞夕刊　八月一八日

「靖国問題」を超えて　『第三文明』十月号　九月

祭りのあと　現代のことば　京都新聞夕刊　十月十九日

大東亜共栄圏の戦後　倉沢愛子氏との対談　朝日新聞　十月二七日

◉岩波講座『「帝国」日本の学知・第八巻――空間形成と世界認識』責任編集　十月

パーラーとダイエット　現代のことば　京都新聞夕刊　十二月十五日

日本をどう描くか　上・戦争の評価　佐伯啓思氏との対談　京都新聞　二月八日

日本をどう描くか　下・改憲をめぐって　佐伯啓思氏との対談　京都新聞　二月九日

規制と規正　現代のことば　京都新聞夕刊　二月二二日

横　山　俊　夫

「協定校への派遣」の記録（Environmental Change Institute, Oxford University Centre for the Environment／森澤眞輔氏と共編）第12回国際交流推進機構運営委員会、第285回京都大学国際交流委員会提出　京都大学国際交流課　三月

Kyoto University Mission Statement（共訳「京都大学の基本理念」英語版　三月二十日役員懇談会了承）京都大学 hp 掲載　四月

しつけと笑い――前近代日本文明考『日本18世紀学会第28回全国大会プログラム報告要領　２００６年6月10・11日』　日本18世紀学会　四月

豊かさの再検討（第23回比叡会議報告書／共同企画・共編）

比叡会議事務局　日本アイ・ビー・エム株式会社　五月

京都大学国際交流推進機構 The Organization for the Promotion of International Relations, Kyoto University（配布用三折一紙／共編）　京都大学国際交流推進機構　七月

開会挨拶『日英高等教育に関する協力プログラム　京都フォーラム2006』同プログラム日本側推進委員会事務局（大学評価・学位授与機構内）　九月

学徒出陣図（京都大学迎賓室設置用解説、和英両文・西山伸氏、グレース・スダ氏と共編）　十月

対談　文（あや）をなして明るい未来可能な地球環境学を（日高敏隆氏と）Humanity & Nature Newsletter No. 41 October 2006.　総合地球環境学研究所　十月

京都文化会議二〇〇六　地球化時代のこころを求めて（会議参加者用冊子／共編）　京都文化会議組織委員会　十月

The 8th Kyoto University International Symposium, Towards Harmonious Coexistence within Human and Ecological Community on This Planet. Swissôtel Nai Lert Park, Bangkok, Thailand（会議英文アブストラクト集／共編）　京都大学　十一月

第8回京都大学国際シンポジウム「地球社会の調和ある共存に向けて」をバンコクで開催『京大広報』No. 619　京都大学　一月

京都文化会議二〇〇六—地球化時代のこころを求めて　報告書（共同企画・共編）　京都文化会議組織委員会　二月

Kyoto International Culture Forum 2006—In Quest of Kokoro/Human Minds for This Planet（jointly planned and edited）Kyoto International Culture Forum Organizing Committee　二月

◉*Sansai, An Environmental Journal for the Global Community*, No. 2, Tracey Gannon and Toshio Yokoyama, General Editors, Sansai Gakurin, Kyoto University Graduate School of Global Environmental Studies　三月

京都大学大学院地球環境学堂・地球環境学舎・三才学林　年報／平成17年度』（共同執筆）　京都大学大学院地球環境学堂　三月

有識者に対するヒアリング『持続可能な社会形成に役立つ日本の伝統的知恵の発掘とその国際貢献のための研究　第一次報告書』（話者校閲改訂版）NPO法人　現代文明21　三月

◉嶋臺塾記録　第二冊（共編）　京都大学大学院地球環境学堂　三才学林　三月

◉難波鉦—松之部抄　人文科学研究所共同研究班「文明と言語」共同研究拾遺（共編）　京都大学人文科学研究所　三月

◉第8回京都大学国際シンポジウム「地球社会の調和ある共存にむけて」—中間報告書—／*The 8th Kyoto University International Symposium, "Towards Harmonious Coexistence within Human and Ecological Community on This Planet"—AN INTERIM REPORT—*.（田代恵氏と共編）　京都大学国際交流推進機構　三月

Opening Remarks, *The 2nd University Administrators Workshop: Innovating Universities through Internationalization, Kyoto University, 1-2 February 2007.*　京都大学国際交流課　三月

Enhancing Kyoto University's Language- and Culture-conscious Collaborations with Southeast Asian Institutions of Science and Technology, lecture at the JSPS Workshop for International Collaboration for the Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia, Bangkok, 12-14 February 2007.

第22回京都大学国際交流推進機構運営委員会資料、第296回国際交流委員会資料　京都大学国際交流課　二、三月

同右説明スライド（河野泰之氏と共編）第22回京都大学国際交流推進機構運営委員会資料　京都大学国際交流課　二月

右二点冊子体　JSPS Bangkok Office　三月

Opening Remarks for the International Symposium on Pine Wilt Disease in Asia, Kyoto University, 15-18 February 2007.　京都大学国際交流推進機構 hp 掲載　三月

京都大学の国際交流に関わる危機管理についての提言（本学役員会宛／共編）　京都大学国際交流推進機構　三月